エレスゲンデ戦記

kaluha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エレスゲンデ戦記

【Ｎコード】
Ｎ３９３４Ｖ

【作者名】
ｋａｌｕｈａ

【あらすじ】
箱入り娘のリーア王女にもっと外の世界を見せてやりたい――ランサー王国の太子シータ・ファルセウスは今夜も隣国の王女を天馬に乗せてエレスゲンデの空を駆けていた。ところが、幸せな二人に突如襲い掛かる大国エドルニア王国軍の侵攻。すべてを失ったシータは、かつての英雄ビーツ・ナインアータや、古い時代からランサー王国に仕えてきた魔術師サーディーン、そして若き騎士たち、わずかな仲間と共に立ち上がろうとするが……呆れるぐらい真面目に、超王道の中世騎士物語風ファンタジーです。斬新なアイデアなどあ

りません。読み飽きたよと言われようとも、愚直に、好きなものを好きなだけ詰め込んで書いていこうと思います。

第一話：ペガサスの王子

その夜、ランサー・コルネイフ間の国境を越える一頭のペガサスがあった。美しい満月の明かりの下、銀の鬣（たてがみ）が煌々と輝いている。

その背に跨る少年の名はシータ・ファルセウス・グランランサー。飛翔湾（エレスゲンデ）七国の一、ランサー王国の太子である。

「今日は調子がいいな、レスト。このままコルネイフ城まで突っ走ってくれ」

湿気の多いスーラ上空の夜気を突っ切り、ペガサスは静かに駆けてゆく。

夜も更け、街は眠りに着く刻限。このような時分に王太子が国境を、しかも無断で越えるなどと言うことは、通常ではとても考えられないことだった。しかしシータ王子に限っては、それが日常茶飯事のことだった。

「リーア、リーア……！」

シータ王子はコルネイフ城の一角にそびえる高い塔のベランダに辿り着くと、いつものようにこつこつと窓をたたいて合図した。

「シータ、あなた、またお城を抜け出してきたの？」

シータを迎えたのはあっさりとした白いドレスに身を包んだ少女だった。艶（つや）のある柔らかな栗色の髪が風に煽られてたなびく。年齢はシータより少し上ぐらいだろうか。

いつものように城を抜け出してきたシータに対してあきれ顔だったが、その声は喜びを隠し切れていない。

「こんな月の綺麗な夜に、じっとしてなんかいられないよ」

シータが手を出して少女を支えると、彼女も慣れた手つきでシータの後ろに乗り込む。シータはその白いほっそりとした手が自分の腰に回されるのを感じて、愛馬に出発の合図を出した。

少女の名はリーア・アルティミア。ランサーの隣国、コルネイフ王国国王の大切な大切な一人娘である。

始めは驚いて諌めていたそれぞれの従者達も、互いの王が黙認の状態だったのでやがて諦めてしまった。ランサーとコルネイフの友好を象徴するものだ、と好意的に受け容れる者もいたが、多くの者はシータ王子の王子らしからぬ身勝手な振る舞いを嘆いていた。

シータ王子は剣術も学問もからきしなのに、女遊びにばかり長けている、賢君と呼ばれるカイラル王の息子とも思えない、とんだ不肖だとささやかれていた。

そんな巷(ちまた)の噂などつゆ知らず、シータ王子自身は至って真剣だった。

「リーアほら見て、エッダ島の灯台だよ。ミルラ海峡の船の安全を守っているんだ」

「ほんとう。灯台の明かりって明るいのね」

箱入り娘のリーア王女は、驚くほど外の世界を知らなかった。シータは彼女に、外の世界のさまざまな物を見せてやりたかった。

「リーア、今日は、ミルラを越えて、カラ島まで行ってみようか？」

「カラまで？……ダメよ危ないわ。あそこはもうコルネイフじゃないのよ」

「大丈夫。闇夜に紛れれば見つからないよ。それに、ニーベルンもエレスゲンデの同盟国なんだから。国境を越えたぐらいで怒られたりはしないさ」

シータは知識を総動員して答えた。飛翔湾(エレスゲンデ)には大小いくつかの島があり、大抵その一つ一つがそれぞれ一つの国になっている。西のスーラ島はランサー、中央のミズラ島はコルネイフ、北のカラ島はニーベルン、と言う風に。

そしてエレスゲンデの小国同士は固い同盟で結ばれていた。それぞれ小国の力を結束して、大陸にひしめく大国たちとなんとか渡り合ってきたのだった。

「ほら、もうニーベルンだ」

シータの言うとおり、あっさりと国境を越えることが出来た。

「ニーベルンの街……」

リーアも王女として何度か訪れたことはあるが、上空から眺めるのはもちろん初めてのことだ。
「昼間明るいうちなら、ニーベルンの赤い瓦屋根がずっと連なって綺麗なんだけどなぁ」
夜の街は、ぽつぽつと明かりが散らばるばかりで、コルネイフとの違いをそれほど感じられない。
「十分よ、シータ。すごく綺麗。宝石箱みたい」
「うん」
シータは喜ぶリーアの声を聞いて、一層張り切って手綱を握った。シータはリーアの喜ぶ顔が見たくて毎夜エレスゲンデを飛ぶのだ。
「もう少しでニーベルンの城が見えてくると思うんだけど。丘のうえに広がる平城は、それはそれは荘厳なんだよ」
「ダメよシータ、本当に。ニーベルンの女王さまに見つかったらどうするの？国際問題になってしまうわ」
「たしかに、あの方は恐そうだなぁ」
シータは苦笑いして、威厳に満ちたニーベルンの女王の姿を思い出しながら、王城を目指すのは諦めることにした。代わりにカラ島の東岸の漁村群を回る。
「可愛らしい村ね。ちらちら見える明かりがついた舟は何かしら。夜になっても漁をするの？」
「ああ、この時期ならイカを漁っているんだろう。イカは光に集まる習性があるから、夜にああやって明かりを焚いて集まってきたイカをとるんだ」
「イカを？イカってあの、シチューや前菜に入っている紫色の柔らかいやつね？」
シータは吹き出しそうになった。
「そう、あの紫色の柔らかいやつだよ。ほんとはもっと大きくて、海を悠々と泳いでるんだよ。コルネイフの海岸でも今頃はたくさんとっているだろう」
「へぇ。なんだか不思議。ああやってとれたものが私たちの食事に

なるのよね。当たり前だけど」
　そうだよ。野菜だってシシの肉だって、領民たちが作ったり捕らえたりするものを食べているんだ。
　何も知らないリーアに伝えたいことがたくさんあった。シータはいつも剣術の練習や学院の授業を抜け出しては、きままに空を飛んで、いろいろなものを見てきたから。
「なんだかすっかり遅くなってしまったね。」
　星がずいぶん動いてしまっている。気付けば今日はいつもより長い時間を費やしてしまったようだ。さすがのシータも焦って天馬を駆った。

　ところが、再びコルネイフの領内に戻り、コルネイフ城を目指してしばらく上空を進んでいた時のことだった。
「あら、シータ、何か、赤い光が見えるわ。何かしら。」
「赤い光？」
　シータは目を凝らしてリーアの指差す方向を見た。あちらの方角はコルネイフ王城の城下町にあたる。
「なんだ？」
　そう思った時だった。
　突然体が宙に浮くような感覚がして、シータは慌てて手綱を強く引いた。
「レスト、どうした！？」
　ところが次の瞬間、ペガサスはバランスを失い、急降下を始めた。
「なっ、いったいどうしたんだ！？」
「シータ！！」
　リーアの悲鳴が耳に激しく響く。しかしシータはどうすることも出来ず、ペガサスの大翼のわずかな空気抵抗に支えられながら、ミズラの深い闇の底に、真っ逆さまに落ちていった。

「シータ、シータ、大丈夫？」
シータはリーアに揺り動かされて目を覚ました。
「リーア……」
はっとして起き上がった。特にひどい怪我はないようだ。左足と腰が痛むが、動けないほどではない。ミズラの深い森に落ちたのが幸いしたのか、レストが守ってくれたのか。
「リーアは大丈夫？怪我はしていない？」
「ええ。大丈夫」
リーアの声もしっかりとしていたのでシータはひとまず安心した。
「これはいったい……、何が起こったんだろう？」
暗やみに目が慣れると、傍らにレストが倒れているのが見えた。
「レスト、大丈夫か？」
愛馬は苦しげに荒い息をしている。
シータは息を呑んだ。その左足と腹部に、いくつもの矢が刺さっていた。
「なんだこれは。」
永らく平和に包まれていたエレスゲンデに生まれ育ったシータは、いやシータに限らず民全員がと言えるが、いささか平和惚けしているところがあった。ペガサスが打ち落とされるなどという事態を、想定したことなど一度もなかった。
そしてその矢羽根を見て、シータは再び驚いた。羽根の装飾の仕方にもそれぞれ国ごとの特徴があるが、それはランサーやコルネイフ、エレスゲンデの国々のものではなかった。
シータは王立学院の授業を必死で思い出そうとした。大陸の国か？この矢羽根はどこの国のものだ？
「シータ！」
リーアが小声で叫び、シータの腕を強く握った。

シータも身を固くする。がさがさという葉擦れの音と、何かを言い合う話し声が、意外なほど近くで聞こえたからだ。
「＊＊＊＊＊＊」
「＊＊＊＊＊＊？」
「＊＊＊＊＊＊」
エレスゲンデの言葉ではない。だが、ルーラ大陸の言葉ともまた違う。
シータのペガサスを打ち落とした相手が、獲物を探しに来たのだろうか。
声は少しずつ近づいてくる。
「リーア、逃げよう」
シータはリーアの手を強く握り返しながら囁いた。
ところが、リーアは立ち上がることが出来なかった。
「リーア！？」
「すみません……。足をくじいてしまったみたいなの。私を置いて逃げて」
「な、何を言ってるんだ。リーア、足を？大丈夫なのか？」
シータは心の中で自分に対して舌打ちをした。さっき大丈夫だ、とリーアが言った時、なぜ気付いてやれなかったのだろう。彼女が無理をしていることに。
しかし時すでに遅く、敵は、ついにシータとリーアを見つけだした。
相手は男三人だった。シータが見たこともない形の甲冑に身を包んでいる。
「＊＊＊＊＊＊」
「＊＊＊＊＊＊？」
相手は二人を見るなり何かを言ったが、まったく分からない。
「＊＊＊＊＊＊？」
「＊＊＊＊＊＊！」
何かを思いついたような表情をして男たちが二人に近づいてきた

ので、シータは必死で体を張り、動けないリーアをかばうように立ちふさがった。
「お前たちは何者だ？ペガサスを打ち落としたのはお前たちか？」
シータは恐怖に震えそうになる声を励まして言った。
「威勢のいい坊っちゃんだな。そちらのお嬢さんはコルネイフのリーア王女か？」
リーダー格らしい男が流暢なエレスゲンデ語で言った。
シータは答えに窮した。なぜリーアだと分かったのだろう？この者たちは何者だ？なんの為にペガサスを？
「まぁいい。いずれにせよ我々が用があるのはそちらのお嬢さんの方だ。そこをどいてくれるか？」
その言葉と表情に、明らかな敵意と不快感を感じたシータは、迷わず腰に帯びた剣を抜き放った。
「目的を言え！お前たちは何者だ？」
「＊＊＊＊＊？」
「＊＊＊＊＊＊！」
「＊＊＊＊＊＊！」
男たちはシータに分からない言葉で、何かを言い合った。まだ少年のシータを嘲笑うかのような、馬鹿にしたような表情。それがシータの自尊心を甚く傷つけた。
「馬鹿にするな！私を誰だと思っている？」
シータは恐れと焦り、そして今火の付いた怒りの感情に身を任せて、目の前の男に思い切り斬りつけた。
感情に任せた意外なほど素早くすべらかなシータの動きに、相手は咄嗟に避けることが出来ず、その刃をまともに受けた。
吹き出す鮮血。鮮やかなその朱色を見て、シータは急に恐ろしくなった。生身の人間を傷つけ、血を見たのは初めてのことだった。がたがたと剣が震え始める。怒りより怖れが一気にシータの全身を支配した。
その後は一方的だった。リーダー格が手傷を追わされ、本気にな

った大人の男三人に、まだやっと十五になったばかりのシータが敵うわけがない。

シータは震える剣で必死に身を護ろうとしたが、相手の熟練した動きに全く着いていくことが出来ず、三人の男にほとんど弄(なぶ)られるようだった。

第二話：敗走

「やめなさい！」
夜気を劈(つんざ)くように鋭い声が響いた。
その声には、三人の男の動きを思わず停止させる程の厳しさがあった。
「やめなさい。大の大人が、よってたかってそんな幼い少年をいたぶることがあなた方の国の流儀ですか？」
誰よりシータ自身が驚いて、リーアの姿を呆然と眺めていた。彼女は痛む足をおして、背筋を伸ばした美しい姿勢でしっかりと立っていた。
「あなた方の言うとおり、わたくしはコルネイフ王国が第一王女リーア・アルティミアです。目的を言いなさい。“わたくしの従者”をいたぶることが目的ではないでしょう？なにゆえ“わたくしの”ペガサスを？あなた達は何者ですか？」
彼女はまったく怯(ひる)む様子も見せず、淀みなく言った。
わたくしの従者？わたくしのペガサス？シータは驚いて思わずリーアの顔を見返していた――リーアは、シータの身分を隠そうとしているのだ。
ペガサスに乗ることができるのは女性だけと相場が決まっている。だから、ランサーの王子が男だてらにペガサスに乗るという噂は各国にも聞こえている程有名な話だ。つまり、シータがペガサス乗りだということがばれてしまえば、即シータがランサーの王子だと感づかれるおそれがあった。
「我々はエドルニア皇国騎士団第十二連隊の騎士だ。見回りをしていたところ敵兵らしきペガサスを見たから打ち落としたまでのこと。」
彼らも騎士の端くれなのか、王女の威厳に満ちた態度に対し、背筋を正して答えた。

「我々の目的は、コルネイフ王国の領土を頂戴することである」
シータは目を見開いた。領土を、頂戴？
「そう、ですか。ならば……」
リーアは少し考えるように言葉を切り、おもむろに壊剣を取り出した。相手は若干ざわつく。
「ならば、コルネイフ王国王女であるわたくしの命は惜しいでしょう」
リーアはそう言うと、突然壊剣を鞘（さや）から抜き放ち、その切っ先を自分の喉元に突き付けた。
「その少年には手を出さないと約束しなさい。さもなくば、わたくしは今ここで喉を突いて死にます」
シータは今度こそ度胆を抜かれた。
「な、何を……言われるのですリーア様！」
シータはリーアに合わせて敬語を使って叫んだ。
リーアがこんな、大胆なことをするなんて。シータはずっとリーアは何も知らないか弱い少女だと思っていた。だが今夜、彼女がこんなにも強いということを思い知らされた。シータよりずっと、一国の王族たる威厳と心構えを持っている。
「王女様、お言葉ですがその駆け引きは成り立ちませんよ。我々は、この少年を殺してからでも充分あなたを捕らえることが可能ですから」
リーダー格の男は冷静だった。
「いいえ。わたくしは本気です。一歩でも動いてみなさい。わたくしはその瞬間に死んでみせますから」
リーアは壊剣をさらに首に押し付けた。剣の鋭さを示すように血がつと流れだし、赤い線を一筋作った。
「……分かった。少年には手を出さないと約束しよう。その代わり、あなたには我々とともに来てもらう。」
男はやっとそう言った。相手は所詮子ども、だが子どもだからこそ、これは本気だろうと判断したのだろう。

「それは本当ですね？本当に彼には手を出さないと誓いますね？」
「ああ。我が軍の他の兵が見つけたときはどうなるか保証出来んが、今は手を出さないと誓おう」
リーアはそれを聞いて安心したようにそっとシータに近寄り、白いスカートを引き裂いて傷口に当ててくれた。そして、耳元に口を近付けて小声で囁いた。
「シータ、ここで二人ともが死ぬわけにはいかないわ。あなたは逃げて。生き延びて、私を助けに来て」
リーアの声はひどく震えていた。リーアだって本当は、すごく、ものすごく怖かったのだ。
シータは思わずその手を握って囁き返した。
「リーア、すまない……！かならず。」
シータは悔しくてたまらなかった。自分にもう少し力があれば、もう少し知恵があれば、リーアを助けることが出来たかもしれないのに。
自分は今夜、堂々と自分の名を名乗ることも出来ず、リーアに助けられるばかりだった。なんて情けないんだろう。
最後にリーアは、その手に持った壊剣をシータに渡した。リーアの血が一筋付いたその壊剣は、銀細工の意匠の施された美しい飾り剣だった。
リーアはシータを勇気付けるように優しく微笑んだ。悲しいほど美しい微笑みだった。
エドルニア兵に連れられて行くリーアを、シータはなすすべなく見送ることしか出来なかった。
甲冑の奏でる金属音と葉擦れの音が遠ざかり、暗い森の中に一人取り残されたシータはしばらく呆然としていた。途端に、疲労と傷の痛みがシータの体をどっと襲った。
だがじっとしている訳にはいかない。この辺りにはまだエドルニア兵がうろついている恐れがある。逃げなければ、そしてなんとかして生き延びなければ。

シータは暗い森の中をリーア達が去っていった方角とは逆へ走り出した。傷の痛みと悔しさに、覚えず涙が流れ始める。シータはリーアの飾り剣をしっかりと握り返した。それが、暗やみとエドルニア兵への恐怖に打ち克つ唯一の方法だった。

やがてシータは森を抜けた。目の前に広がるのは沈黙の平原。丈の低い草原が月明かりに照らされて微かにたなびいている。そしてその更に向こうに、コルネイフ王都ユトリアの街が見えた。

シータは衝撃を受けたように立ちすくみ、遠くかすむ街を凝視した。

ユトリアの街が燃えている。夜空を焦がす炎が赤く見えるほどに。本当にエドルニア軍はコルネイフを侵攻したのだ。

リーアの街が燃えていく。駆け出して今すぐ王都へ向かいたい思いに駆られた。

しかし、今の自分にいった何が出来るだろう?傷だらけで、疲労困憊した姿で王城を目指したとして、途中で先ほどのようなエドルニア兵に捕まって殺されるだけだろう。

シータは歯がゆく苦い思いを噛み締めながら、ユトリアの街に背を向けて再び歩きだした。

第三話：ビーツ・ナインアータ

柔らかい朝の光が、シータを揺り起こした。シータは薄く目を開き、驚いて周りを見渡した。

さやさやと風に揺れる草原が延々と続いている。昨夜の出来事が急によみがえってきて、シータは暗澹（あんたん）とした気持ちになった。

あの後しばらく平原をさまよったが、疲れ果てて倒れてしまったのだ。こんなところに倒れこんでいて、朝までよく誰にも見咎められなかったものだ。野草が隠してくれたのだろうか。

体が鉛のように重たい。体中のあらゆる場所が痛んだ。でも、歩き出さなければならない。逃げ延びなければ。

シータは疲れた体を鞭打ってゆっくりと歩き出した。

「おやっさんおやっさん、大変だよ！男の子が、傷だらけの男の子が……！」

おやっさんと呼ばれた男は、けたたましい声に驚いて持っていた鍬（くわ）を傍らに置いた。

「朝からいったいなんだって言うんですか？」

「とにかく来とくれよ！」

なんだか分からないまま彼は村外れまで連れられて行った。

男はその村にたった一人で住んでいた。男がいつ、どこから来たのかを村の誰も知らなかった。だが、男が誠実な人柄で、世話好きの働き者だったから、いつのまにか村中の者が彼を頼るようになった。村に何か事件が起こると、必ず彼が呼び出された。

少年は、本当に傷だらけだった。ここまで辿り着くことに体力と気力のすべてを使い果たしたとでも言うように、村人に支えられてぐったりとしていた。

男は一目見て少年がコルネイフの城下町の貴族か何かだろうと判断した。汗とほこりにまみれていたが、髪は綺麗なブロンドだった。服装は、元は貴族、それも超上流の貴族の着るような非常に上等な装束だったのだろう、今は見る影もなくあちこちがずたずたに寸断され、土と血の色に染められていた。

王都ユトリアは外国の軍団の襲撃を受けて壊滅状態らしい。この少年は、戦場から逃げてきたのかもしれない。

「ずいぶん身なりの良い子だけど、いったいどこのお坊ちゃんだろうね？」

「分からないが……とりあえず私の家へ運ぼう」

男は少し考えて、その場にいた者たち全員に向けて言った。

「また昨日のようにエドルニア兵の見回りがくるかもしれん。この子がここに来たことは、くれぐれも秘密にするように！」

男の家へ運ばれたシータは、そのまま丸一日眠り続けた。目が覚めたのはその日の夕刻、日が落ちてからのことだった。

「ここは……」

シータは見知らぬ場所の、寝台の上で目を覚まし、驚いて声を上げた。

すぐに男が飛んできた。

「目が覚めたか？」

シータはゆっくりと体を起こし、まじまじとその男を見つめた。頭がまだぼーっとしている。だが、この男、どこかで見たことがあるような気がする。

「ここはどこだ？」

「エンザドの村だ。ずいぶん酷い怪我をしてるようだが、ユトリアから逃げてきたのか？」

シータは自分の体を見下ろして悲鳴を上げそうになった。着ていた服は脱がされ、農民が着るようなもんぺのような物を履き、上半

身には何もつけていなかった。素肌の上に体中包帯が巻かれている。
「わっ、私の服は？なんだこの格好は！？」
「なんだということはないだろう。酷い怪我をしていたから、村の者に手伝ってもらって手当をさせてもらっただけだ。」
「そ、そうか。すまない。驚いただけだ。……そなた、名前は？」
男は少しむっとした様子だったが、しぶしぶ答えた。
「ビーツだ。」
「ビーツ……」
シータの脳裏を何かが閃いた。ビーツ……？
「まさかそなた、ビーツ・ナインアータか！？」
男はその名を呼ばれて、明らかに驚いた顔をして硬直した。
「なぜ、その名を……」
「ビーツ・ナインアータなのだな？」
「やめてください。私は、その名はもう棄てたんだ」
ビーツの顔は堅く強ばったままだった。
記憶の中のビーツと、目の前に居る男とが完全に一致した。彼がランサーで活躍していたのはもう7～8年も前のことだから、随分老け込んでいたし、無精髭を生やして泥だらけの汚らしい農民の姿をしていたが、それでも隠し切れないきりりとした目元、鼻筋に、当時の面影がしっかり残っている。
ビーツ・ナインアータは、カール・マグヌス、マーク・オラインドという二人の騎士と並んで三金星（トリ・フェトリエンタ）と称されたランサーの英雄だ。英雄好きのランサーのお国柄、国民総てから熱狂的な人気を集めていた。当時まだ幼かったシータもそれに漏れず、三金星の姿を見て騎士に憧れたものだ。
そう言えば、いつの間にかあの熱狂的な人気は廃れてしまったのだが、その一因は確か、マークが遠征の際に命を落とし、ビーツが国外へ逃亡したと言う噂が流れたことだった。シータはまだ幼かったので、その辺の事情をよく覚えていない。
「まさかとは思いますが、あなたは、……ランサーの若君では？」

ビーツは恐るおそると言うようにそう口にした。
この人ならばと思い、シータは大きくうなづいて答えた。
「その通りだ。私はシータ・ファルセウス、ランサーの王太子だ。」
ビーツは仰天したように慌てて腰を屈めた。
「これは、なんと言うご無礼を……！！お召し物に、ランサーの紋章が刻まれていましたのでまさかとは思いましたが、若君でしたとは！」
その姿は騎士と言うより、もはや貴族や王に対する農民の仕草が板に付いていて、シータは少し悲しくなった。
「顔を上げてくれビーツ。私の方こそ失礼なことをしてしまった。私も昔はそなたの姿を見て、騎士に憧れたものだ」
「お恥ずかしい。私は御国と御君から逃げ出した、裏切り者です。」
「昔の事情は私は何も知らない。だが、ここで出会ったのも何かの縁だろう。私を、助けてくれないか」
シータは昨日から今日までの出来事を、包み隠さずビーツに話した。
「私は今まで、ランサーの王子として、大きな力を持っていると思っていた。何でも出来ると思っていた。だがそれは、私の周りの者が私を支えてくれていただけのことで、実際私には何の力も無かった。リーアが連れられていくのに、何も出来なかったんだ。一人では何も出来ないということを思い知ったんだ。」
話しているうちにまた悔しさが込み上げて、シータの目に再び涙が滲みかけた。
ビーツは、そんなシータの話をじっくりと耳を傾けて聞いてくれた。
「若様、かまわないのです。それが、王者と言うものです。王は百人の従者に支えられて、百の力を持てばそれでよい。百の従者を従える力こそが王に最も必要な力なのですから。そして……そのことに気付くことの出来たあなたは、おそらく真に善い王となることが出来るでしょう。」

ビーツは諭すように言ってくれたが、その時のシータには彼の言う言葉の意味がまだ理解できなかった。

ともかく、シータはまだ知恵も力も何も持ち合わせてはいなかったが、ビーツ・ナインアータと偶然とは思えないこの運命的な再会を果たせたことが、唯一彼が「強運」と言う、得難い力を持っていたことの証しなのかもしれなかった。

第四話：黒い天馬（1）

シータは、ユトリアで戦禍に遭って孤児となってしまった少年として、身分を隠してビーツの家にしばらく逗留（とうりゅう）した。

それから約半月もの間、シータはビーツの家の寝台の上から離れることができなかった。傷と疲労に加えて、急激な環境の変化にすっかり体調を崩してしまったのだ。ビーツも今はただの貧しい農民に過ぎない。食料の備蓄は乏しく、シータに満足な食事を準備してやれないことを悔しく思った。大切な故国の太子を死なせるわけにはいかないと、八方手を尽くして食料や薬を求めた。

それでも、ビーツの努力の甲斐あってか、シータは三週間目が過ぎたあたりから徐々に回復してきた。

傷が癒えてくると、シータは多くの時間を費やしてしまったことに焦りを感じ始めた。

「ビーツ、コルネイフの状況はどうだ？ランサーは、他のエレスゲンデの国々はどうなったんだ？」

ビーツもここのところコルネイフやエレスゲンデの状況について出来る限り情報を集めようとしてきた。しかし、コルネイフの状況はともかく、周辺地域の情報はあまり入ってきていなかった。

「コルネイフはすでにほぼ全域がエドルニアの支配下にあります。王城は陥落。陛下は戦火のうちに、亡くなられたそうです。」

「そうか……陛下は、亡くなられたのか。」

陛下が亡くなられた。シータは初めてコルネイフが陥落したことを実感した。王城が陥落、陛下が亡くなられ、それはつまり、コルネイフという国が失われてしまったことを意味する。

「リーアは？リーア王女はどうしているんだ？無事なのか？」

「それが、王女様については全く話が流れていないのです。亡くなったという話も出ていなければ、捕えられたという話も聞こえてきていません。」

「何も……？」
シータは不思議に思った。リーアはエドルニア兵に捕らえられたはずだ。
「ですが、もっと不思議なのは周辺諸国についての話です。エドルニア軍がランサーや他のエレスゲンデ諸国に攻め込んだという話も出ていませんし、逆に周辺諸国がコルネイフを助けて援軍を送ってきたという話もございません」
たしかに不思議なのはそのことだった。エレスゲンデ諸国は北のニーベルン、コルネイフ、ランサー、南の三国ルトラ、リマ、アストーラ、そして少し外れてマラノ。全ての国々が固い同盟で結ばれていたはずだ。コルネイフが侵攻されたとなれば、真っ先にまず近隣のランサーとニーベルンから援軍が送られるはず。
「ランサーは、いったい何をやっているのだろう。父上は何をやっているんだ。何故、コルネイフを助けようとしないんだ」
シータは歯がゆい思いを感じていた。
情報が全く入ってきていないので何とも言えなかったが、シータとビーツも含め村の人々は、コルネイフ以外の国々もすでにエドルニアに攻め込まれたか、もしくは戦わずして降伏し、その指揮下に入ったか、いずれかだろうと推測はしていた。
「ともかく私は、一刻も早くランサーへ戻りたい。」
だが、どうすればいいのかシータには分からなかった。コルネイフは小さな島だ。国中にエドルニア兵がはびこっているようだし、奴らに気取られず島を出る方法などあるのだろうか。せめて、ペガサスがあれば……。
「シータ様、あなたはペガサスを操る技術をお持ちだとか。」
「ああ。以前話した通りだ。」
「それならば、方法があるかもしれません。」
「どういうことだ？」
「隣町のシクロに、元々コルネイフの軍用だったペガサスが一頭、余っているという噂を聞きました。」

ビーツの話によれば、元々シクロの町出身の騎士が乗っていたペガサスだったのだそうだが、彼女が病気か戦かで命を落とし、乗り手がいなくなってしまった。問題は、そのペガサスが黒天馬だったことだ。ただでさえ気難しいペガサスの中で、黒天馬というのは特に扱いが難しいと言われている。黒天馬はフィードと名付けられていたが、初めの乗り手にとてもよく懐いていて、彼女が死んだ後も、彼女に忠義を尽くし、けして他の騎士がその背に乗ることを許さなかったのだそうだ。

「黒天馬か……それは、珍しい。」

シータも噂だけは聞いたことがあったが、実際に見たことは一度もなかった。黒い毛並みの天馬と言うのは非常に希少で、扱いも難しいが、一度手懐ければ主人に非常に忠実で、性能も普通のペガサスより格段に高いと言われていた。

「他に乗り手が見つからなかったため、黒天馬はしばらくその騎士の祖父の手元にあったそうです。祖父は亡くなった孫娘の形見としてシクロの自宅で大切に面倒を見ていたのだそうですが、今回この戦乱の中、シクロの町もエドルニア兵の襲撃を受けました。彼の生死は不明ですが、エドルニア兵に押収された彼の自宅には黒天馬がまだ繋がれているようです。おそらく、エドルニア兵も扱いに困っているのでしょう」

「そうか。その黒天馬を手に入れることが出来れば……」

「はい。黒天馬ならば闇に紛れて島を出ることも可能でしょう。ただ、……忘れてはならぬのが、黒天馬は非常に扱いが難しいという点です。殿下、無礼は承知でお聞きしますが、黒天馬を乗りこなす自信はおありですか」

シータは自信を持って頷いた。

「心配はいらない。必ず乗りこなしてみせる」

確かに、苦労して手に入れた末に乗れないなどということがあれば、こんな馬鹿な話はない。だが、そんな不安も跳ね返すほど、シータにはペガサスを操縦することにかけては絶対的な自信があった。

そもそも一般的にペガサスは男子を嫌う。シータがペガサスに乗れることは奇跡だ、とまで言われていた。ペガサスを操縦することにかけては、自分には他人とは違う特別な力があると思っていた。
「レストは、本当にいい馬だったんだ。あれを失ったのは本当に残念だった。あれ以上に良い天馬にはもう出会えないかと思っていたが、こんなところで黒天馬に出会えるとは」
シータは滅多に手に入らない黒天馬にすっかり心惹かれてしまっていた。ここで出会ったのは運命かもしれない。黒天馬は、自分との出会いを待っていてくれたのかもしれない。
「分かりました。ではしばしお時間をください。探りを入れてみます。」
ビーツはシータの言葉に多少の過信があるのではないかと心の内で疑いながらも、そう請け負った。
「それと、ビーツ。もう一つ頼みがあるんだ」
シータは打って変わって控えめな口調で言った。
「なんでしょうか？」
「私に、稽古を付けてくれないか？せめて自分の身は自分で護れるようになりたいんだ」
シータはこれまで、剣術というものに全く興味を持てなかった。強くなりたいという気持ちがなかったから、稽古にも全く身が入らず、さぼってばかりいた。今となってはそんな自分を後悔していた。
「かしこまりました。私ももう剣を棄ててから十年近く経ちます。お役に立てるかどうか心もとないですが、出来る限りお力になりましょう」
昼間は村の者やエドルニア兵に見咎められる恐れがあったから、二人は日が落ちてから完全に暗くなるまでの時間、村の外れの林の中で調度いい大きさの木切れを手に稽古した。昼間は昼間で、ビーツはシータに鍬を持たせ、自分の畑を一緒に耕やさせた。
「鍬を持てば、腕や足腰に筋力がつきます。体力もつきます。半月も伏せっていらっしゃったから随分お痩せになったこともあります

が、それでもあなた様の腕は少し細すぎます」
ビーツは自分の腕とシータの白い細腕を比べながら苦笑した。
「まったくその通りだ。私の腕は頼りなさすぎるな」
シータも強くなるためと思い、王太子に対するものとも思えないビーツの指導に、文句一つ言わずついていった。このわずかな期間に、シータはよく働き、よく食べ、失った体力を徐々に回復していった。

第五話：名刀アルブサール

ビーツは黒天馬の持ち主が今も健在で、シクロの町の小さな宿屋に身を寄せていることを聞き付けてきた。二人はまず、彼に話を聞きにいくことにした。

「私は、ビーツ・ナインアータと申します。これは甥のファルス。あなたが、黒天馬フィードの持ち主とお聞きして、参りました」

男は、リスト・コウコルスと名乗った。皺や白髪の目立つ年ごろではあったが、いかにも武人らしい厳しい眼をした男だった。

「ほう。して、私に何用かな？」

「はい。フィードを、お借りしたいのです」

ビーツは単刀直入に言った。

「詳しい事情は申し上げられませんが、ある御仁が、コルネイフを脱する方法を求めているのです。その方もまたペガサスの騎士です。ペガサスを操ることにかけては熟達した技術を持っている。黒天馬ももしくは、操ることが可能かと」

コウコルスは、静かにビーツの話を聞いていたが、やがて口を開いた。

「お見受けしたところ、あなた方も身分のある方々のようだ。庶民と同じ姿をされていても、立ち居振る舞いで分かります。私の聞き違いでなければ、お名前を、ビーツ・ナインアータと言われたか？」

問われて、ビーツはただ頷いた。

コウコルスは参ったとでも言うように苦笑して言う。「まさか、ランサーのビーツ・ナインアータ殿だと言うのですか？」

「私の名を、ご存じで？」

「当然だ。私もかつてはコルネイフの一兵卒でしたから。身分もなく、才能にも恵まれませなんだが。それに、孫娘もよくランサーの英雄の話をしておりました」

彼は昔を懐かしむように目を細めた。
「フィードに活躍の場を与えていただけるならば、こんな嬉しいことはないが……口惜しいことに、拙宅はエドルニア兵の駐在所として押収されてしまった。フィードも、どうなってしまったか分からない」
「では、コウコルス殿、わたくしどもが、フィードをエドルニア兵から取り返します。もしそれが叶えば、我々にフィードを貸していただけますか？」
「フィードを、取り返すと？」
彼は驚いたように言って、苦笑をしながら付け加えた。「……そうですか。なんだか私は、戦いもせず屋敷と天馬をむざむざ明け渡した自分が情けなくなってきました」
「このような時世では、それも致し方ないことだと思います。でももし、フィードを貸していただけるなら、私は必ず、この国を、コルネイフを救うと約束します。だからどうか、力を貸してください」
シータはそこで初めて口を開き、自分の口から彼に願いを伝えた。戦いもせず大切なものを明け渡してしまったのはシータも同じだった。だからシータは、同盟国ランサーの王子として、責任を果たす必要がある。
「良い目をしておられるな。……合い分かった。フィードはあなた方にお預けしよう。エドルニア兵から取り戻すために、私も出来る限りの手助けは致します」

ビーツが動いたのは、それから数日後のことだった。
「シータ様、少々手筈を整えさせていただきました。」
そう言ってビーツが取り出したのは、身分ある者を相手にするような、高級の商人が着る装束だった。ビーツの分とシータの分、きちんと二人分用意されている。

「こちらをお召しください。シータ様には申し訳ありませんが、私の従者になって頂きます」
きちんと体の汚れを落とし、ビーツもその少し長い縮れ髪をきちんと後ろで束ねれば、二人ともちゃんと高級商人に見えた。
「ビーツは商人にしては少し、体が厳(いか)つすぎるがな」
シータは思わず笑いそうになりながら、ここぞとばかりに言ってやった。
「それで、いったいどうするつもりだ？」
「すべて私にお任せください。シータ様は私の隣についていてくだされば、それで構いません。首尾よくことが進んだなら、黒天馬に乗り、そのままランサーまでお逃げください」
シータが唯一ビーツに言われたことは、コウコルスの準備してくれた屋敷の間取りをいざという時のためにしっかり頭に入れておいてくれと言うことだけだった。ペガサスが繋がれている裏庭の厩(うまや)の位置関係も把握しておく。

コウコルスの家はなかなか立派な屋敷だった。町から海に向かって少し張り出した丘のような場所にある。なるほど、この位置ならば町全体を見渡すことが出来るし、建物の広さもそれなりにある。駐在所として目を付けられたのは当然だろう。
ビーツは屋敷の正面から堂々と踏み込んだ。当然衛兵に止められる。
「止まれ、何者だ。」
「ラザーズ商会の者です。本日、ガーラント将軍にお目通りをお願いしていたはずですが。」
「ラザーズ商会？」
二人の衛兵はエドルニア語でしばらく何か言い合った後、一方を残して一方が屋敷へ入っていった。シータはビーツはいったどうするつもりなのだろうと、鼓動を高鳴らせながらその様子を見ていた。ビーツは至って涼しげな顔をしているが、本当に大丈夫なのだろう

か。
　しばらく待った後、先程の衛兵が再び現れ、
「失礼を致しました。どうぞ」
と促すので、二人は無事あっさりと屋敷の中へ入ることが出来た。
　入ってすぐは、小さなロビーになっており、左右と正面に部屋がある。コウコルスに教えられた間取り通りだ。
　二人は右手の応接室へ通された。皮張りのソファへ座らせられる。ロビーを見た時から思っていたが、なかなかどうして立派な屋敷である。調度も、華美ではないが、武人の持ち物らしく落ち着いたきちんとした物が揃えられている。
　コウコルスは身分も才能もなかったと言っていたが、それでは騎士の家の出ではない職業軍人だったのだろうか、いずれにせよ相当な武勲を挙げていたことには違いない。身分のない一般の兵卒にここまでの持ち物が持てるとはとても思えないからだ。
　遅れて入ってきたのは、いかにもエドルニア人らしい、濃い焦茶の髪と、同じ色の口髭をたっぷりと生やした中年の軍人だった。
「ラザーズ商会の商人と言ったな。待たせてすまない。私がガーラントだ」
「初めまして。ラザーズ商会のクロー・エルゲイと申します」
　ビーツは相手に合わせて自己紹介をする。
「ラザーズ商会か……」
　ガーラントはにやりと笑って言った。
「偽称するなら、次からはもう少し巧くやることだ。部下に調べさせたが、ラザーズ商会などという名の商社は、コルネイフ中探させたが、まったく出てこなかったぞ」
　ガーラントは面白そうに声を立てて笑った。もうばれているではないか。シータはひやひやした。
「これは失礼致しました。次からはきちんと勉強いたします。」
　ビーツもそんなことを言いながら相手に調子を合わせて苦笑している。いったいどうする気なんだ。

「本当の名はなんと言う？主人の名前は？」
「申し訳ございませんが、それは申せぬのです」
「そうか。……まぁいい。どうせ、どこぞのずる賢い貴族だろう」
ガーラントは一人合点したように言って、とんとんと言葉を継いだ。
「ひとまず用件だけでも聞いてやろう。身分か？領土か？それとも、亡命か？」
それを聞いてシータは、話の流れが少し見えた気がした。つまり、相手は我々をコルネイフの貴族だと勘違いしているのだ。あまり考えたくないことだが、コルネイフ貴族の中でも強かな者には、エドルニア兵に賄賂なりを送って、少しでも良い待遇を得たり、外国に逃げようとしたりした者があったのかもしれない。
「いえ。」
ビーツは彼の言葉を遮るように一言言って、少し間を置いた後、一息に言った。
「ここに黒天馬がいるという話をお聞きしました。黒天馬を、頂きたいのです。黒天馬は我々エレスゲンデの民ですら扱いの難しいペガサスです。あなた方も黒天馬の処分には困っているのではありませんか？」
「黒天馬を……？」
相手は少し訝しげな顔をした。ビーツはすかさず続ける。
「我々に黒天馬を預けてくだされば、我々なりの方法で黒天馬を売り捌いて見せましょう。我々コルネイフの民はコルネイフの民なりのルートで黒天馬の取引きが可能です。希少な黒天馬ならば、相当な高値で売ることも可能かと。高値で売れた場合は、それに応じた割合いで代金をお返しします。どうです、悪い取引きではないのでは？」
「ふん……なるほどな。黒天馬を高値で売ると」
ガーラントは口元に手を当てて考えるような仕草をしながら言った。

「具体的にはどのぐらいになるんだ？取り分の割合いは？」
「コルネイフの通貨で最低六千万ロットは保証します」
ビーツは自信に満ちた声で言う。
「ろ、ろくせんまん！？」
ガーラントは驚いた声をたてる。
シータも目を見張った。ペガサスの市場には詳しくないが、六千万とは大きく出たものだ。シータはビーツの演技力と交渉術に舌を巻いていた。さすが元ランサーの英雄と称され活躍していた軍人と言おうか、度胸があるのか、その言葉には一寸の隙もない。見事に相手を引き込んでしまっている。
「取り分は三対七でいかがですか」
「三対七？それはこちらの取り前が七と言うことで構わんのか？」
ビーツは苦笑した。
「何をおっしゃる。それではあまりにこちらの分が悪すぎます。せめて、四六としましょう。こちらの手間賃を含めて」
「四六か。……まぁ良いだろう。だがもちろん、六千万のうち幾らかは今ここでもらっておくぞ。黒天馬だけ持ち逃げされてはたまらんからな」
シータは驚いた。相手はもう承知してしまった。こんなに簡単なことか。黒天馬を手に入れるためにどれだけの困難が待っているかと思っていたと言うのに。
シータは思わずビーツの横顔を見たが、彼は相変わらず真剣な顔で交渉を続けるだけだった。
「それはもちろんこちらも承知しております。ただ、あいにくこちらも現金の持ち合わせがございません」
ビーツはそう言うと、傍らに持っていた細長い包みを取り出して、テーブルの上に置いた。そう言えば、ここへくる道々、ビーツが何を持っているのか気になってはいたのだ。
ビーツはおもむろに包みを開く。
シータはあっと声を上げそうになった。それは、見事な装飾のさ

れた鞘に入った大剣だったからだ。
「名刀アルブサールの名をご存じですか？エレスゲンデに六つしかない名刀です。」
シータは耳を疑った。アルブサール？
「ほう、これは確かにいい剣だ」
ガーラントは剣を鞘から抜き放ち、惚れぼれと眺める。
いい剣？……当たり前だ。
アルブサール。それは、エレスゲンデでも特に優れた名刀だけにしか与えられない銘。シータの父カイラル王が持つ物と、南の聖リマ王国の大将の持つ物、そしてニーベルンの国宝となっている物、あとはの二つは持ち主を知らないが、最後の一つは……そう、三金（トリ・フェト）星（リエンテ）のビーツ・ナインアータが、その、度重なる武勲の栄誉の証としてシータの父カイラル王から贈られた剣だ。
「売ればどれだけの値が付くか、私にも分かりません。これを、頭金としてお渡ししましょう」
ビーツの声が微かにぶれたのをシータは聞き逃さなかった。当然だ。これはビーツが父王カイラルから栄誉の証として贈られたもの。彼はナインアータの名などもう棄てたと言っていたが、八年農民生活をしている間も、やはりこの剣だけは捨てずに持っていたのだ。騎士の魂であり彼の栄誉の証であるこの剣だけは、どうしても棄てることが出来なかったのだろう。
それを彼は、売り払ってしまおうとしているのか。騎士の魂とも言える剣を、売り払ってしまうと言うのか。怒りとも悔しさともつかない感情が込み上げ、シータは状況も忘れて叫んでいた。
「ダメだビーツ！やっていいことと悪いことがある！私のためにこんな……！」
場の空気が凍った。
ガーラントは、突然口を開いた従者の少年の言葉の真意を計ろうとするかのように、目を細めて二人の顔を見比べた。
「金髪に碧眼……。ペガサス……？」

ガーラントの呟いた言葉はエドルニア語だったので、二人には分からなかった。
「まさか……」
それでも、状況を見極めたビーツは、素早くアルブサールを手元に引き寄せ、シータに鋭く耳打ちした。
「殿下、外へ！」
シータはビーツの言わんとするところを理解し、窓際へ走った。
「いかんっ！誰か、誰か来い！敵だ！」
ガーラントが叫ぶ。
シータは庭に面する木の窓が開いているのを確認し、よじ登って通り抜けた。この時ばかりは体が華奢で良かったと感じた。
「ペガサスだ、ペガサスを守れ！絶対にペガサスを渡してはならん！」
追いすがろうとするガーラントに、アルブサールを構えたビーツが立ちふさがる。
シータは庭に転がり出た。間取りはきちんと頭に入っていた。厩はすぐそこだ。
しかし、庭にはすでにガーラントの叫び声を聞きつけた衛兵たちが出てきていた。
まずい、これを一人で切り抜けることが今の自分に出来るか？
シータはひとまず、ビーツに渡されていた小さな剣を懐から取り出して抜き放った。

第六話：黒い天馬（2）

「しめた」

黒天馬は厩の中ではなく、一匹離れて外に繋がれていた。おそらく、他の馬とそりが合わないのだろう。

シータはそのあまりの美しさに、一瞬我を忘れた。毛色は青毛の馬よりなお黒く、黒鉄（くろがね）のように鈍く艶めいていた。そして何よりもその翼である。ペガサスの白銀の翼は見慣れているが、黒天馬の大翼は闇に塗りつぶされたような漆黒だった。

「なんて、美しい。」シータは知らずそう口にしていた。

黄泉よりの使者のようなその姿。シータは心が躍った。ランサーの王太子たる自分にこそ相応しい天馬だ。

慌てて立ちふさがった衛兵を、シータは驚くほど素早い身のこなしですり抜けた。衛兵などもう眼中になかった。ただ目の前のペガサスだけに心を奪われていたのだ。

「待てっ小僧！」

衛兵がシータを取り押さえるより早く、シータは黒天馬に駆け寄った。天馬には鐙（あぶみ）も、鞍すら付けられていなかった。しかしシータは黒天馬を繋いだ綱を小剣で素早く断ち切ると、慣れた身のこなしでにまたがった。

「フィード、行こう！」

だが次の瞬間、フィードは激しく嘶（いなな）くと、後ろ脚を高く蹴り上げた。鞍も鐙もない状態で、シータは咄嗟にしがみつくことも出来ず、無様に振り落され、地面に転がり落ちた。

「……っ！」

フィードはシータを振り返りもせず、再び激しく嘶（いなな）くと、大きく翼を広げ、自由になった身体で空へと飛び立っていった。

「そんな……」

シータは呆然としてその後ろ姿を見送った。

完全に拒絶された。こんなことは初めてだった。ペガサスを操ることは、シータにとって唯一絶対的な自信を持って人に誇れることだった。そのことだけは、厳格な父もシータを認めてくれていたと言うのに。

体中の力が抜けたように、シータは駆け寄る衛兵に対し抵抗することもなく、手足をつかまれ、捕らえられた。それだけシータは自らの誇りと自信を失い、絶望に囚われていた。

そこへ駆けつけたのはビーツだった。ビーツはアルブサールを片手に、襲い掛かる敵を相手に戦っていた。八年も現役を退いていたとは思えない、素晴らしい動きだった。その剣技もさることながら、彼には広い視野で戦況を見極める優れた判断力のセンスがあった。背中に目が付いているのかと思いたくなるほど、周囲の敵の動きに敏感に反応し、どの相手の剣を受けるべきか、どの相手に注意すべきか、的確に見極めながら確実に敵を倒していく。

「ガーラント将軍、強すぎます！応援は？応援はまだなのか！？」

飛び交うエドルニア兵たちの声。

もしシータがそのビーツの姿を見ていたとしたら、往年の彼の姿と重ね合わせ、感嘆していたことだろう。しかし絶望に囚われたシータの目はその時何も映してはいなかった。

「殿下、何をなさっているのですか！？」

「……ダメだビーツ、すまない。私は、フィードに認めてもらうことが出来なかった。たった一つの誇りすら失った」

「シータ様、しっかりしてください！」

ビーツはシータを捕えていた衛兵からシータを奪い返し、無理やりその体を立ち上がらせて怒鳴った。

「あなたは本当の愚か者ですか。そんな、ちっぽけな誇りが何になりますか？それであなたは、すべてを諦めてしまうのですか？コルネイフは、ランサーはどうなります！？」

シータは頬を叩かれたようにはっとしてビーツの顔を見返した。

一瞬、何を言われたのか分からなかった。王太子たるシータに、

そこまでストレートな言葉をぶつける人間は、これまで居なかった。
「ビーツ、私は……」
ちっぽけな誇りだと？……だがそれは、シータにとってはただ一つの大切な誇りだった。大切な……いや、でも、何か大切なことを忘れてはいないだろうか。
ランサーの太子であり、特別な力を持つ自分の方が、元の持ち主よりよほど黒天馬に相応しいなどという奢り、そして、なんとしてもあの美しい天馬を手に入れたいと言う欲が有りはしなかっただろうか。黒天馬に認められるほどの資質を自分が持っているのだと、誰かに誇りたいという気持ちがどこかに有りはしなかっただろうか。
シータはそこでようやく、自分の過信と幼い思い上がりに気付いたのだった。
違う、今自分がやらねばならないことは、そんなちっぽけな誇りを守ることなどではない。自分はどうあっても、生きてランサーに帰らねばならない。生き延びて、リーアとコルネイフを助けねばならない。その為に、ビーツが天馬を探し出し、ここまでのことをしてくれたと言うのに。このままでは自分は、天馬を手に入れることも出来ず、ビーツが自分の為に尽くしてくれた苦労も全て無駄にしてしまう。
シータは左手の親指と薬指を口にくわえた。甲高い音が鳴り響く。ペガサス乗り特有の指笛だ。
「ビーツ、フィードを追いかける。援護をしてくれ！」
「はっ！」
シータはビーツの援護を受けながら、右手に持った小剣で何とか身を護りつつ、フィードの飛び去った北西を目指した。その間も指笛を鳴らし続ける。
帰ってきてくれフィード、せめて、今このときだけでも構わないから、力を貸してくれ。
私は、ランサーに帰らねばならない。お前の主人の国、コルネイフを救うと、約束したんだ。

すでに二人は数十人のエドルニア兵に囲まれており、とてもフィードを追いかけられる状態ではないように思えたが、ビーツの働きは予想以上に凄まじかった。シータを守りながら、敵を倒し、確実に活路を切り開いてゆく。そのあまりの力の差に、エドルニア兵の多くはすでに戦意を喪失仕掛けていた。

シータの指笛はその間も甲高く鳴り続ける。シータはビーツの作ってくれたわずかな隙を突いて敵の輪を抜け、走った。フィードの去っていった空を目指して。

その時、誰もが予想だにしなかったことが起こった。茜に染まりかかった西の空から、黒天馬が掛けてきたのだ。ビーツでさえ目を疑った。なんとかここからシータだけでも逃がすことが出来ればとは思っていたが、黒天馬は半ば諦めていたのだから。

「フィード、戻ってきてくれたのか！」

あるいは、フィードの死んだ主人（あるじ）が、シータに味方してくれたのかもしれない。

「フィード、私は醜い驕りばかりが達者で、何も出来ない愚かな王子だ。それでも私に力を貸してくれるのか？」

誇り高い黒天馬は、シータの数歩先に着地すると、全てを見透かしているかのような澄んだ目でシータを見つめ、鼻を鳴らした。まるで幼いシータを鼻で笑ったかのように見えた。

「フィード……！」

シータは思わず、その首に思い切り抱きついた。なぜかそのとき初めて、フィードと心が通じあったように思えたのだ。フィードはもう逃げなかった。

「フィード、私はひとまず私を助けてくれた恩人を、救いたいと思う。」

シータはすかさずその背に体を預けると、ビーツを迎えに行った。あっけに取られて見ていた衛兵が、思い出したように動きだす。

「ビーツ！乗ってくれ！！」

シータは馬上から体をぎりぎりまで右に傾け、半ば抱き留めるよ

うにビーツの体を引き上げた。リーアにはよくやったことがあったのだが、ビーツは彼女の二倍近い体格と体重をしている。シータは予想外の余りの重みに振り落とされそうになりながらも、ビーツの戦士らしい腕力と機敏な動きに助けられ、どうにか騎上へ抱き上げることが出来た。

　衛兵達ももちろんそれを黙って見ていた訳ではない。射手は一斉に矢をつがえ、黒天馬を狙って放った。しかしそこはさすがのシータ王子と言おうか、空に出た彼は、まさに水を得た魚のようだった。その巧みな操縦と黒天馬の飛行能力の高さが相まって、矢の雨をひらりとひらりと掻(か)い潜(くぐ)る。

「殿下、私のことなど放ってお逃げくだされば良かったものを」

「いや、ビーツ、私の愚かさは良く分かっただろう？そなたが居てくれなくてはダメだ。せめて、私が無事ランサーに帰り着くまでは、そばに居てくれないか」

　ビーツはそんなシータの言葉に、思わず苦笑して言った。

「あなた様のその謙虚さは本当に、見上げたものです。陛下のご教育が良かったのでしょうな。その気持ちが有る限り、あなた様はいくらでも大きく成長することが出来ましょう。そして、多くの仲間があなた様を支えようと力を差し出すことでしょう」

　ビーツのその言葉はけして皮肉などではなかった。ビーツはシータの幼さゆえの愚かさを見抜いては居たが、その何事にも真っすぐで、認めるべきことを素直に認める謙虚さには心から賛美していた。王侯や貴族などという高い身分にある者には、なかなかそれを身につけることは難しい。

「……畏(かしこ)まりました。では、殿下が王城に帰り着くまで、この不肖ビーツ・ナインアータが御身をお護り致します」

　こうして、シータとビーツはランサー王城を目指し、茜色の空の下を飛んだ。しかし、目指す自国ランサーで、更なる困難が待ち受けていようとは、この時の二人には知る由もなかった。

第七話：三新星

「タリエスク将軍が亡くなったそうだ。」
「ええ、聞いたわ。」
「キース、あの噂は本当なのか？タリエスク将軍の処刑を命じたのが、シータ王子だと言うのは。」
「……それは、ありえない。どんな間違いがあったとしても、それだけは絶対にない。」
「そうよね。まさかそんなこと……」
ランサー城下の小さな酒場のカウンターで、顔を寄せ合うようにして語り合う三人の男女の姿があった。
中央に座った女性の名はアリス・シッチリグ。女性も男子とともに戦うエレスゲンデの伝統にもれず、ランサーにも多くの女流騎士がいたが、いかにも屈強な女戦士といった厳つい女性の多い中、彼女はその女性らしい愛敬ある顔立ちと仕草で、ランサー王国騎士団の中でもアイドル的な存在となっていた。ただしその愛らしい姿を侮(あなど)ってはならない、彼女の剣の腕前は超一流。十八で騎士団に入団した時、二十人を越える先輩剣士を牛蒡抜きしたという伝説を持っている。
そして、そんなアリスでも絶対に敵わない相手というのが彼女の右に座るキースと呼ばれた男――長い金髪をきっちりと束ねた貴族風の男と、左隣に座る黒髪の男、スコットの二人だった。三人は士官学校に居た頃からの仲で、それぞれ国軍の騎士となった今でもしばしばこうして酒場に集っては近況を報告しあっている。そんな三人を、英雄好きのランサーの人々は、かつての英雄“三金星”になぞらえて“三新星(トリ・ネルフィエンテ)”と渾名(あだな)していた。名実ともに、ランサー王国軍の期待の新星である。
そんな三人の最近の話題はもっぱら、数週間前に帰還したシータ

王子についてのことだった。
「だがキース、ネザル法相やあのコール・オドネル長官を失脚させたのがシータ王子だと言ったのはお前だぞ？」
「分かってる。だが、あの方がタリエスク将軍に処刑を命じるなどと言うことは、それだけは、ありえないことだ。」キースは重ねて言った。
「そう信じたいがなぁ…」
王宮内の政局や貴族達の近況についての情報を提供するのは、三人の中で唯一、貴族の出身であるキースの役目だった。キースは、ティリンス家という超名門貴族の若様である。彼の父親である現ティリンス家当主は政界の重鎮としてランサーの朝廷に出入りしていたが、キース自身はそうした政界の権力争いを好まず、軍人として、騎士としての仕事にばかり力を入れていた。
「シータ様はほんとに、変わられたわよね。何というか以前はもっと……まだ少年らしいあどけなさと言うか、幼さのようなものを持っていたけど、今はなんだか、触ったら切れる刃物みたいだわ」
「ああ、今まで国の政治などに全く興味を示されなかったのに、最近は毎日のように朝廷に出入りされている。これはいったい、どういう風の吹き回しだろうな」
「失踪されている間に、何かあったんだろうか」
これは皆同じ印象だった。シータ王子は帰還してから、人が変わったように政治に意見するようになった。そしてカイラル王もなぜかまだ年若いシータの意見を尊重しているように見える。
「以前は困るぐらいにぐうたらな王子だったけど、今は真逆ね。シータ様が王太子としての立場を自覚なされたなら、とても良いことだと思うけど、あれはちょっと、性急すぎだわ。あんなやり方じゃ、必ず反発や軋轢が出てしまう」
「そうだな。まさかネザル法相が職を外されるなんて、思いもよらなかった。」
「……こらこらそこのお三方、ちょっと声が高いんじゃないか？国

軍の騎士がそんなこと言い合ってるなんて、朝廷や国軍の人間に聞かれてもまずいし、国民に聞かれてもまずいぞ」
酒場の店主が三人に酒を出しながら言った。
「すみません、カールさん。」
三人は揃って頭を下げた。三人が三人とも、店主のカールには頭が上がらなかった。
知っている者はほとんど居ないし、そうと知った場合、多くの人間が彼のその転落ぶりに驚くだろうが、酒場の店主はカール・マグヌス――かつての三金星の一角である。彼は軍人を辞めた後、すき好んで（騎士が商売人に転落するなどと言うことは、当時のランサーではまず有り得ないことだった）この場所に、王国の騎士に一番近い場所に、酒場を開いたのだった。
「まぁオレも、前々からあの王子はいけ好かないと思ってたがな」
カールは声を潜めてそう言うと、からからと笑った。三新星も思わず笑みをもらす。カールのそのあっけらかんとした人柄が、この酒場に自然と人が集まる理由だった。
「いずれにせよ俺は、早くエドルニアと戦いたい。陛下はいったい何をやってるんだ？」
三人の中でもっとも直情なスコットは、我慢がならないと言うように漏らした。
「それは……今は言わない約束だと言ったろう？今はとにかく、機を待つべき時なんだ。ターキニーの出方もまだはっきりしない。」
ランサーや近隣諸国がコルネイフに助太刀しなかったこと、そしてコルネイフがエドルニア占領下に入った今もなお、反撃を仕掛けようとしないことについて、キースは何度も“機を待つべき時”と言う言葉で弁明してきた。しかし、その言葉で国王軍の軍人たちを抑えられるのも時間の問題だろう。騎士たちは戦いたくてうずうずしている。
実のところキースは、朝廷から流れてきた噂として、ランサーが攻勢に出ない理由を薄々知っていた。全ては、“ペガサス”を巡る

問題なのだ。
　エドルニアは元々、東の大陸の小国に過ぎなかった。それが、この数十年の間に、いつの間にやら巨大な国力を付け、東の大陸の国家をことごとくその手中に収めていった。今や西の大国ターキニーに負けるとも劣らないほどの大国となっている。
　そして、その西のルーラ大陸に位置するターキニーの防護壁として存在しているのが他ならぬ飛翔湾（エレスゲンデ）だった。
　飛翔湾（エレスゲンデ）にはその名のごとく、世界で唯一ペガサスが存在する。飛翔湾（エレスゲンデ）が小国家の集まりながらも、今まで東西の大国に肩を並べてきたのは、一つそのペガサスの存在に拠ることであった。エレスゲンデのペガサス騎士団はたった一連隊で一個師団を相手に出来るほどの力があると言われている。
　エレスゲンデ七国の同盟は、これまでターキニーを守る剣として働く契約を結ぶ見返りに、それぞれの独立をターキニーから承認されていた。分かりやすく言えば、エレスゲンデはターキニーの属国なのである。
　そして、ここからが本題だが、そのエレスゲンデの一角であるコルネイフがエドルニアに落とされた今、まず素直に考えればエレスゲンデはターキニーの庇護を求め、ターキニーと共にエドルニアと戦うのが筋である。ターキニーにしてみても、エレスゲンデのペガサスをエドルニアに奪われることは避けたいはずだ。
　ところが、何故か今回、コルネイフが落とされたにも関らずターキニーは手をこまねいていて、未だに動く気配が無い。噂に寄れば、ターキニーの国内は現在荒れており、国力を著しく低下させているのではないかと言われている。つまり、エドルニアに正面切って戦いを仕掛けられるほどの国力が無いのではないかと。それは逆に言えば、それだけエドルニアが強力だということの裏返しでもある。
　だからこそ、エレスゲンデ諸国はここへ来て、西の大国ターキニーと東の雄エドルニア、どちらの国に着くことが得策かを見極めようとしているのだ。もしくは、エドルニアに付き、ターキニーの場

合と同様、ペガサス騎士団の戦力を引き換えに、エレスゲンデの独立を願い出てみてはどうかと。実際に、エドルニア側からそのような話が出てきているとの噂もある。

だが、そんなことをランサーの国民や軍人たちが、素直に「はい」と頷いて従うとはとても思えない。軍人の中でも古い者は特に、タ－キニーに古くから忠誠心のようなものを持っている者が多いし、何よりも、コルネイフ国王を殺し、コルネイフの城下を焼き払ったエドルニアに、敵対心を燃やしている者ばかりだからだ。ここでエレスゲンデがエドルニアに寝返るなどということがあったら、コルネイフにどう顔向けをすればいいのか。何があっても、コルネイフを襲ったエドルニアを許すことなど出来ない、エレスゲンデ諸国の力を結集して、エドルニアと戦うべきだ、そう考える者が大多数を占めているのだ。

第八話：帰還（上）

事態が大きく動き出したたのは、それから数日後の夜のことだった。

アリス・シッチリグは、夕食を終えて数刻がたった頃に緊急の使いに呼び出され、カールの店で一人キースの来るのを待っていた。こんな遅くに、突然呼び出されるなど、初めてのことだった。とにかく早く来てくれとのことだったから、いったい何事だろうかと思ったが、当のキースはなかなか来なかった。

キースはスコットも呼んだのだそうだが、あいにく当直で、来られるのは夜半過ぎだと言う。

仕方がないのでアリスは、カウンターに一人座り、カールに度の低いエールを出してもらってちびりちびりと飲んでいた。

そこへ、一人の男がやって来たのだ。　からんからん……と酒場のドアが開き、アリスはキースが現われたのだろうかと、何気なくそれを見やって硬直した。黒く長い縮れ髪を無造作に束ね、いかにも戦士然としたがっしりとした体付き。年齢は五十手前ぐらいか。

アリスは思わず店中の客を見渡した。誰も気付かないのだろうか。彼はもはや、ランサーでは忘れ去られてしまった存在なのだろうか。そう思ったら、さすがに店主のカールは、蒸留酒の瓶を片手に固まっていた。

「よぉ、カール。老けたな」

「老けたな、じゃねぇ！お前、今まで何してやがった！！」

そしてカールは、自分の声が大きすぎたことに気付き、周りを見渡しながらビーツに手招きし、奥へ入れと厨房に向かう扉を示した。

「マスター、俺、一人でも大丈夫ですから、どうか、しばらく奥でお話しください」

事態を察した若い店員が気をきかせて言ったので、カールはその言葉に甘えるように店の奥へ入っていった。

アリスはカウンターに座ったままその一部始終をあっけに取られたように見ながら、鼓動を高鳴らせていた。間違いない。三金星のビーツ・ナインアータだ。彼は、還ってきたのだ。エレスゲンデの一大事に、国を護るために還ってきたのだろうか。アリスもまた、三金星に憧れて騎士を目指した世代だ。士官学校に居た頃から、彼らに憧れ、いつか一緒に肩を並べて戦いたいと思っていたのだ。

スコットはこのことを知っているのだろうか。キースは？緊急の知らせとは、このことだったのだろうか。

「てめぇいったい、今までどこで何をしてやがったんだ？」

カールは奥の厨房に入るなり、半ば怒鳴るように言った。

ビーツは苦笑しながら答える。

「この八年いろいろやってたよ。まぁ何をやっても、サマにならなかったがな。……農民が、一番性に合ってたかな」

「農民だと？……ったく、心配させやがって。それでいったい、なんだってこんなタイミングで帰ってきやがったんだ？国の一大事に駆け付けたつもりか？」

カールは身振りでビーツを厨房の片隅の小さなテーブルに座らせながら聞き返した。

「違う。別に俺は、帰るつもりなんてさらさらなかったんだ。肩身が狭くて、とても戻ってくることなんて出来ねぇよ。……ただ、ちょっとした邂逅（かいこう）があってな。戻らざるを得なかったんだ」

ビーツの表情が暗かったので、カールはそれ以上のことを深く突っ込んで聞いていいのか、少し迷った。

「家族には会ったのか？」

「まさか。合わせる顔なんてあるかよ」

ビーツは自嘲するように言った。

「いまさら何言ってる。お前の息子ももう二十四だ。父親に負けない立派な騎士になった。最近は三金星になぞらえて、三新星なんて言ってもてはやされているんだぞ」

「三新星……。そうか……、あいつは元気にやっているのか」
ビーツは昔を思い出すように目を細めた。カールはそんなビーツのために、蒸留酒を出してやった。ひとまず今必要なのは酒だと思った。
「だが、ビーツ。ランサーは今実際、かなりヤバい状況にある。本当に、お前の力が必要とされるかもしれないぞ。いつエドルニア軍に攻め込まれてもおかしくないというこの状況下で、ペガサス騎士団はともかく、国軍にはあまりいい人材がいない。マーク・オライントとお前を失った後、その穴を埋めるだけの人材が育っていないらしく、旅団長クラスのポストは山ほど余ってる。その上……本当に惜しいことだが、つい最近シーリャ・タリエスク将軍が亡くなった。」
「タリエスク将軍が？いったいなんで」
「分からん。最近の朝廷は不透明なことが多すぎる。旧臣の多くが次々と首をすげ替えられていたり。……まぁ、そのほとんどは確かに、一新すべき人事だったりもするんだが。あまりに強引すぎるところがある。噂によれば……最近帰還した王太子殿下が国政に口出しをしているとか」
「殿下が……」
ビーツはそれを聞いて、口籠るように口元に手を当てた。その眼は鋭く、何かを考えているようだ。
「ああ。まったく、以前はあれほど国政にも軍事にも興味を示されなかったと言うのに、どういう風の吹き回しか、最近突然朝廷に出入りするようになってな。俺はなんとなく、こんなこと言っていいのか分からないが、……何か、不吉な予感がする。ランサーを混乱させている一因が、殿下なのではないかと」
「カール。実は俺もそれを聞いて戸惑っている。……王太子殿下が帰還したと言うのは本当か？それは、いつごろのことだ？」
カールはビーツの言葉の意味を理解しかねて、首を傾げながら答えた。

「どう言う意味だ？殿下が帰還されたのは、たしか先月の末だ。だいたい二週間ほど前か」
「どこから帰還したんだ？それまで何をされてた？」
「……？何が言いたい？どこから帰還したかは知らんが、コルネイフ襲撃のどさくさに紛れて失踪されていたと言うことだぞ」
ビーツは蒸留酒の入ったグラスに口を付け、さらに少し、考えるような仕草をしながら沈黙した。
「タリエスク将軍の死。朝廷の人事の一新……。陛下は、何を考えていらっしゃるのだろう」
ビーツはグラスを置き、心を決めたように色を正してきっぱりと言った。
「カール、俺にも何が起こっているかよく分からんが、二週間ほど前に帰還したというその王太子はおそらく……影武者だ。」

酒場のカウンターでキースを待っていたアリスは、ようやくやってきたキースを見て、彼が隣に座る間も待てずに口を開いた。
「キース、聞いて！いま、今ね、ビーツ・ナインアータ将軍が、あのビーツさんが、店に来たの！今、カールさんと一緒に店の奥に居る」
「ビーツさんが？」
キースはキースで今日見た信じられないニュースを一刻も早く親友に伝えたいと思っていたので、出端（でばな）を挫かれた思いだったが、これにはさすがに驚いた。
「ビーツさんが……そうか。今回のことと、何か関わりがあるのだろうか」
キースはそう呟いて、気を取り直すように話しはじめた。
「実は宮廷でも、驚くべきことがあったんだ」
キースは今日宮廷で見聞きしたことを早足に説明した。

第九話：帰還（下）

その夜、ランサーの宮廷で小さな晩餐があった。名のある貴族が主催をし、カイラル王と王太子も出席する予定となっていた。

ティリンス家の時期当主であるキースももちろん招かれ、嫌々ながらもそれに参加していた。権謀術数渦巻く宮廷の雰囲気は苦手だが、キースだってこうした宴の中で情報交換をしたり名前を売り合ったりすることが宮廷で生きていくために重要なことだと言うこともよく分かっている。

それに、本人の好むと好まざるに関わらず、キース・ティリンスの周りにはいつも小さな人だかりが出来た。その端正な顔立ちに加え、大貴族の子息にありがちな高慢なところが全くなく、嘘偽りを好まないさっぱりとした気性が、男女問わず人気を集めていたのだった。

しばらくして、華やかな会話と音楽で賑やかだったサロンが、潮が引くように静まった。カイラル王と王太子のお出ましである。陛下も私的な催しと言うことで、公務を行なっている時よりは幾分くつろいだ服装をしていた。とはいえもちろん、王たる者の威厳を損なうことのない高級な絹地に絢爛な刺繍の入った豪華な物だった。

人々の注目を浴びるのはカイラル王よりもむしろその隣に控える王太子の方だった。皆、帰還後、異様なほどの変貌ぶりを見せた王太子に興味深々なのである。

キース自身も、今会場に姿を見せたシータ王子を見て、改めて思った。アリスの言う通り、研ぎ澄まされた刃のような雰囲気をまとっている。ランサー王家の血筋らしい、絹糸のような艶（つや）やかさを持った金髪を若者らしくすっきりした短髪にし、少し長めにした前髪の下に覗く空色の瞳は、彼がどんな表情をしていても、そう、たとえにこやかに笑っている時ですら、切れるように鋭く冷徹だった。失踪している間、何か彼の内面を変える大きな出来事があったので

はないかと勘ぐりたくなるのも良く分かる。
カイラル王が席に付き、杯を持って立ち上がった。
会場がしんと静まり返り、陛下の言葉を待っていたその時だった。
再びサロンの入り口が開き、宮廷の給仕達に半ば止められながらもそれを押し切るように突っ切ってくる者があった。
会場が異様などよめきに包まれる。
キースですら、手に持った杯を取り落としそうになるほど驚いた。開いた口が塞がらないとはこのことだ。
今、会場に入ってきた少年は、薄汚れてあちこちが破れた商人風の服装をしていた。髪も汗とほこりに塗(まみ)れてくしゃくしゃに乱れている。しかし、その髪は良く見れば見事な金髪だったし、瞳は鮮やかな空の色だった。肌は陽に焼けて小麦色をしている。それでも、見まごうはずはない、シータ王子の姿をしていた。

シータは、つかつかと会場を横切り、もっとも上(かみ)の席のカイラル王の目の前まで歩いて行った。そして、父王の隣に座り、今、静かな眼差しで自分を見返す少年の姿を見て、心臓が止まりそうになった。鏡を見ているかのように、自分とそっくり同じ顔をしていたからだ。
会場中の人間が息を呑む気配を感じた。
「父上、これはいったい、どういうことです？この者は……？影武者ですか」
シータは訳が分からず、父王を前にやっとのことでそう言った。
「影武者だと？私を影武者と申すか貴様。無礼な。私を愚弄するつもりか？そなたこそいったい何者だ？」
父王の隣に座る少年はぱっと立ち上がり、シータを鋭く睨み返しながら早口に言った。
「なるほどな。確かに影武者と言うのも良いかも知れぬ。我が王子によく似ておるわ」
父王ののんびりとした口調に、シータは頭にさっと血が上るのを

感じた。
「な、何を……父上、あなたの眼は節穴ですか？自分の実の息子の見分けもつかないのですか！？」
シータの声はサロン中に高く響き渡った。人々は一言も発っさず、固唾を呑んで成り行きを見守っている。誰にも、区別が付かなかった。それほどに二人の少年の姿は良く似ていた。
「わしの眼を節穴と申すか小僧。影武者に使ってやってもよいと思ったが、そこまでの無礼を許すことは出来ぬ。どうせ物の怪か魔術士の類であろう？この場で斬ってその正体、暴いて見せようか」
カイラル王は杯を置き、腰から剣を抜き放った。
会場がどよめく。
「なっ……父上、なぜ私が分からないのです？お願いです、きちんと私を見てください。シータ・ファルセウスはこの私です！」
そこで急ぎ進み出た青年の姿があった。長い金髪を束ねた、確かティリンス家の嫡男だ。
「まことに恐れながら申し上げます陛下。この者をここで斬って捨てるのは簡単なことですが、きちんとこの者がどこの何者なのかを正し、その上で刑に科した方が良いのではございませぬか。」
ティリンス家の青年は、父王の前で深く跪(ひざまず)きながら進言した。
「……ふん。たしかに今は宴の席だ。こやつの処遇は後でも良かろう。牢にでもぶちこんでおけ」
シータは信じられない面持ちで父王の姿を見返しながら、つまみ出されるように牢へ連れられて行った。

「なにそれ、シータ様が、二人？いったいどういうこと？」
「分からない、まったく、何が起きているのか。本当に、瓜二つなんだ。だが、今日現われたシータ様の方が」
キースは言って、自分の言葉の奇妙(おかし)さに笑いだしそうになりながら続けた。
「より“本物”らしかったんだ。ここ一ヵ月で苦労をされたのだろ

う、肌は陽に焼けていたし少し痩せられていた。髪も少し長くなっていた。そして何より、シータ様らしい、晴れた空のような済んだ眼をされていた」

キースは先に還った方のシータ王子の、切れるような冷たい眼を思い出しながら言った。表情を見れば歴然だ。

「だが、奇妙なのは、二人のシータ王子を目の前にした陛下の反応だ。陛下は少しも驚かれた様子がなかった。普通、もっと驚いて、どちらが本物かを見極めようとするはずだろう？だが、そんな様子は少しもなく、ただ今夜現われた方のシータ様を偽物と決め付けて、あげくその場で斬り殺そうとした。……おかしいとは思わないか？」

アリスも頷いた。

「なるほど……そうね。私は現場に居なかったから想像することしか出来ないけど、……どちらかは王子によく似た偽物、もしくは、……陛下が驚かれなかったと言うことは、本当に王子様なのかも知れないわ。シータ様の他に、カイラル王に男子が居たのかもしれない。双子の兄弟、とか？」

シータ王子はカイラル王のたった一人の王子のはずだった。シータの母親は、王子を産むときに亡くなり、彼女を溺愛していたカイラル王はその後も、后をむかえることはなかった。しかし、后をむかえることがなったと言うだけで、別に関係のある女性が居た可能性は十分にあるし、隠し子が居たからと言ってなんら驚くことでもない。

しかし、キースはそんなアリスの言葉を半ば否定した。

「いや、俺はむしろあれは……」

キースは少し口籠もりながらも続けた。

「おかしなことを言っていると笑わないで欲しいが、あれは、魔術の類ではないかと思った」

「魔術？」

「ああ。あの、冷徹な眼差し。それに、陛下の最近のご様子。なぜ陛下はあの王子の意見をあそこまで尊重するのか。なぜ陛下は二人

の王子を前に、迷わずあの王子を選んだのか。まるで、あの、王子の姿をした少年に、心を奪われてしまったかのようだ。あの少年、いや、もしかしたら、あのシータ王子に瓜二つな姿の、皮を一つ剥いたら、とんでもない者が隠れているのかもしれない……」

「いつも冷静なキースの言葉とも思えないわね。魔術だなんて。……でも、魔術師が表舞台に、しかも一国の国政に関わって魔術を使うなんてなんてこと、有りえるのかしら？」

魔術師は普通、世間に干渉を持ったりしない。世間の人々とは感覚の違う、超然した考えを持つ。彼らは人知を超えた巨大な力を持つが、それゆえにその力をみだりに使うようなことはしないのだ。

「だが、サーディーン・ウッディールの例があるじゃないか。」

キースはランサーに古い時代から仕える一人の魔術師の名を出した。

「彼女は特別だわ。彼女はランサー王家に、古くから並々ならぬ思い入れを持っているようだから。それに、彼女は今まで一度も、ランサーの為に魔法を使ったことはないわ。ただ知恵を貸してくれるだけ」

「それはそうだが、つまり魔術師も、時には世間に干渉することもあると言うことの証拠なんじゃないか？」

「そうね……魔術か。今は、なんとも判断できないわ」

アリスは首を横に振って言った。スコットの来るのを待って、彼の意見も聞きたいと思った。

「待て……！頼む待ってくれ！！私はシータだ！この姿を見れば分かるだろう？コルネイフで戦乱に巻き込まれ、ビーツ・ナインアータに助けられて、黒天馬に乗って帰ってきたんだ！」

牢へ連れられる道々、シータは自分が自分であることをなんとか証明しようとしていた。

しかしシータの手錠の鎖を持った兵士は、シータの必死の訴えに眉一つ動かさず、カイラル王の命令に忠実に従った。
そして、半ば押し込められるように、シータは乱暴に牢へ放り込まれた。固い牢の床に体を強か打ち付けられて、シータは一瞬息がつまりそうだった。シータはその痛みに耐えながら、手錠のせいで不自由な体で地べたからなんとか起き上がりつつ、錠を下ろそうとする兵士に食い付かんばかりの勢いで叫んだ。
「私はランサーの太子だぞ！王太子たる私に、こんな……、こんな仕打ちが許されてたまるものか！お前達、いつか、今日のこの行為を、後悔する時が来るぞ！」
シータはあまりの理不尽な仕打ちに、怒りと悔しさを押さえ切れず、兵士達を脅し付けるように声を張り上げたが、牢の錠は無慈悲に下ろされ、去っていく兵士の後ろ姿の残る闇に、シータの叫び声ばかりが滑稽なほど虚しく響くだけだった。
「……なぜだ。なぜこんなことになったんだ。」
フィードの背に乗り、ビーツとともにランサーを目指していた時はまさか、こんなことになろうとは思ってもみなかった。
あの、自分とそっくりな顔をした男はいったい何者なのだ。シータは何より、父王の隣で自分を冷ややかに見返していたあの男が許せなかった。父上は自分を物の怪か魔術の類と言ったが、まるで逆ではないか。父上は、なぜあんな奴のいいなりになっているのだろう。なぜ、自分をシータだと信じてくれなかったのだろう。そしてなぜ、あの場に居た物達の誰も、それを疑問にも思わず、シータを救ってくれなかったのだろう。
考えれば考えるほど、理不尽で悔しい思いにシータは駆られた。
そして一方で、父王はあの場ではあくまでシータを偽物扱いしたが、後ほどこっそりとシータを救いに来てくれるのではないか、そんな期待も捨てきれなかった。

第十話：父と子

その日最後の客は、アリスとキースが待ち兼ねていたスコットだった。スコットは夜勤明けの疲れた体でカールの店へと向かった。キースから緊急の用だということだが、いったい何があったのだろう。

スコットが店に入ると、カウンターのいつもの席にアリスとキースが陣取って待っていた。

「待たせて悪かったな。いったいどうしたんだ？こんな時間に」

スコットが聞くと、アリスとキースは意味ありげに目配せをし合った後に言った。

「カールさんが、店の奥で待ってるわ。あっちの扉から、中へ入って」

「カールさんが？何でまた」

「いいの、とにかく、行ってあげて。」

スコットは予想外の状況に戸惑いながらアリスの示した扉へ向かった。カールさんが名指しで自分を呼ぶなんて初めてのことだ。

扉を開けると、そこは厨房になっていて、部屋の端に据え置かれたテーブルを挟んで、二人の男が座っていた。その男は、スコットに背を向けて座っていた。くせのある黒髪。筋肉の付いた厚い背中。

ああ、そう言うことか、と冷静に判断する自分がどこかに居て、一方ではこの場で今すぐ回れ右して逃げ出すことも出来るがどうするか、などと、果敢な騎士であるスコットらしくない考えが頭をよぎったりもした。

だが、スコットはつかつかと歩み寄り、いきなりその胸ぐらを掴んだ。

「どのツラ下げて帰って来やがったこの野郎！！」

スコットは有りっ丈の声で怒鳴った。そうしないと、自分の感情に負けてしまいそうだった。この数年、貯めてきたはずの怒りが、

どこかへ消え失せてしまいそうだった。
「スコットか。随分と汚い口を聞くようになったじゃねぇか」
ビーツ・ナインアータはスコットを見上げながら言った。
「なんで、なんで今更帰ってくるんだよ？遅すぎんだよ。母さんは、死んだぞ。あんたの帰りを待ちわびて、あんたが必ず帰ってくると片時も疑わず」
スコットはビーツの胸ぐらを掴んだまま更に畳み掛けた。
「なんで、なんでだよ……」
「だけど、帰ってきたじゃねぇか。やっぱりちゃんと、帰ってきたじゃねぇか」
カールは優しく諭すように言った。
「ビーツ、こいつはすげぇぞ。お前が居なくなってから、たった一人でエンナを支えて、今や立派な騎士だ。最年少で連隊長になった」
スコットは父ビーツが突然行方をくらましてから、ナインアータの当主として必死で家と母とを守ってきた。自分達に一言も何も言わず、国王軍を抜け出していずこかへ逃げた父親を憎んだ。スコットは三金星と呼ばれた父を幼い頃からずっと誇りに思って生きてきた。だから、許せなかったのだ。自分の思いを裏切り、母親と自分を捨てて消えてしまった父のことを。
スコットは士官学校時代を、逃亡兵の息子と笑われて過ごした。ビーツは熱狂的な人気を誇っていただけに、その人物の逃亡や家族の転落ぶりはまた一つのゴシップとして面白おかしく飾りたてて語られ、スコットは人々の好奇の目に曝されてきたのだ。
遠征中に戦死したマーク・オラインドとの対比もまたスコットの気持ちを逆撫でした。マーク・オラインドの死は偉大な英雄の死として華々しく語られたにも関わらず、ビーツについては、戦友であるマークを捨てて逃げたのではないかという心ない噂まで流れていた。
スコットは、父に限ってそんなことは有り得ないと、父を信じたかったが、真相は誰も知らず、誰にも教えられなかったから、スコ

ットには父を信じ切ることが出来なかった。
「そろそろ、ちゃんと教えてやってもいいんじゃないか？昔のことを。こいつだってもう大人なんだ」
ビーツは何も言わない。
「とりあえずまぁ、お前も座れよ」
カールはスコットを無理矢理ビーツの隣に座らせた。
「お前の生まれるよりずっと昔の話だ。三金星が一番活躍してたのは、俺たちがお前達ぐらいの歳だった頃だ。三新星なんて呼ばれてるお前達三人みたいに、ほんとに仲が良くてな。」
カールはちらりとビーツの顔を見たが、ビーツが特に嫌がる素振りも見せなかったので、話を続けた。
「それが、そんな三人の仲を引き裂く事件が起こった。まぁ、よくある話だよ。マークとビーツが、同じ女を好きになったんだ。相手はお前の母親、エンナ・カレントだ。勝敗は誰の目が見ても明らかだった。身分が違いすぎたからだ。オラインドは超名門貴族。対してエンナは破産すれすれの、貧しい下流貴族の娘だった。」
ナインアータは古くからある騎士階級の家系だが、あくまで武家であり、貴族ではない。たしかに身分としてはカレント家とナインアータの方が釣り合う。
「エンナがどっちの方を好きだったのか、俺は未だに分からん。でも、結局エンナはビーツと結婚したんだ」
スコットは、初めて知る親の昔話を、多少居心地の悪い気持ちで聞いていた。母は一度もそんな話を口にしたことなどなかった。
「それから、三金星はバラバラになっちまった。俺はいつまでも昔のことに拘り続ける二人が歯痒くてならなかったよ。そんなの、よくある話じゃねぇか。あんないい女、取り合いになるのも無理はねぇ。だが、こいつはたぶん、後ろめたい気持ちをずっと引きずってたんだろうな。正々堂々と戦って勝ったわけじゃないってことが、ずっと後ろめたかったんだろうな。だからこそお前はあの時、家族も身分もすべて捨てて逃げ出した。違うか？……ビーツ、俺もきち

んとあの日の真相を知ってるわけじゃない。話してくれないか、あの日、お前達の間で何があったのか」
ビーツ・ナインアータは当時のことを思い出そうとした。
あの頃、ランサーの西海岸に位置するリベラ海での海賊行為が残虐で、マーク・オラインドの部隊とビーツの部隊が偶然一緒に討伐に派遣されたのだった。
ビーツは何年かぶりにマークと肩を並べて戦った。その戦いの中で、ビーツとマークはお互い昔と同じような絆を思い出していた。マークは何も変わってはいなかった。だからそれが余計に切なかった。どうしてもっと早く、そのことに気付けなかったのか。もっと早くそのことに気付けていたなら、何か変わっていたかもしれないのに。
「あいつは、土壇場で俺をかばったんだ。俺の、ミスだった」
ミルラ海の海賊は卑劣かつ残忍だった。奴らをあなどっていたわけではない。しかし、深追いをし過ぎた部下を救う為に、ビーツは危うく命を落とし掛けた。
「あいつは俺をかばって死んだんだ。俺は馬鹿やろうって言ったよ」
ビーツは感情的になることなく、あくまで淡々と語った。
「なんでお前が俺なんか助けるんだって。お前を裏切った俺を、なんでお前が助けるんだって。そしたら、死の間際にあいつは言いやがったんだ。『お前が死んだら、エンナが悲しむ』」
狭い厨房を、痛いほどの沈黙が支配した。
「……俺はそれで分かったよ。ああこいつは、今だにずっとエンナのことを、思ってたんだな、ってな」
カールもスコットも、何も言えず、身じろぎも出来なかった。
だから、ビーツはそこから逃げ出したのだ。エンナを悲しませたくない、エンナを幸せにしてやってほしい、そう願ってビーツをかばったマークの気持ちが痛いほど分かってはいながら、それだからなおのこと、彼を差し置いて、自分だけ幸せになるなどと言うことに、耐えられなかったのだろう。マークを裏切った卑劣な自分だけ

が生き残って幸せになるなどと言うことに、耐えられなかったのだろう。
「おおいに笑ってくれて構わねぇ。情けない父親だって、罵(ののし)ってくれよ。こんなくだらねぇ私情に流されて、国を護る仕事をおっぽりだして尻巻いて逃げ出すなんてな。とんだ恥さらしだ。騎士の風上にも置けねぇ」
ビーツはつらつらと自嘲の言葉を並べ立て、悔しげにうつむいた。
「俺は、」
ビーツはうつむいたまま続ける。
「俺は、償いのつもりで国へ帰っては来たが、お前に会うつもりはなかったんだ。情けなくてとても……会わす顔がねぇ。」
スコットも正直、聞きたくはなかった。ずっと、真相を知りたいと思ってはいたが、こんな話を聞きたくはなかった。認めたくなかった。父親と別れた時、スコットはまだ十六の少年だった。スコットにとって、十六の時から変わらず、父ビーツは、輝かしい名声に彩られたランサーの英雄ビーツ・ナインアータだった。それは今日まで、少しも色褪せずスコットの心の中にあった。だから、認めたくなかった。そんなビーツ・ナインアータも、やはり一人の男であったのだと言うことを。強く誇れる父親であり英雄である前に、弱さも兼ね備えた一人の男だったのだと言うことを。
「お前に、会うつもりはなかったんだ。だが、……俺は、やはり、もう一度お前に会えてよかった。」
ビーツはスコットの頭に手を遣り、不器用に引き寄せながら言った。
「……立派になったな。俺は、お前を、誇りに思う」
父親のその腕が震えていたので、スコットは、顔を上げることが出来なかった。大人になったスコットは、ようやく、父親を理解できた気がした。認めねばならないのだと理解することが出来たのだった。

第十一話：裏切り

「スコット、アリス、聞いてくれ、シータ様の捕らえられている場所が分かったぞ！」
「本当？」
スコットとアリスはカールの店の厨房でキースからの朗報を聞いた。
三人とカール、ビーツは、あれから何度かこのカールの厨房に集まって話し合った。
ビーツの口から、シータ王子が失踪してから今日までのことを聞き、三新星の三人はそれぞれが見聞きしたシータ王子の現況と、カイラル王や朝廷の対応についての情報を持ち寄った。
なんとかしてシータ王子を救い出し、ビーツの証言によって彼が本物のシータ王子であることを証明しようと、五人は懸命に情報を集めようとした。しかし状況は芳しくなかった。シータ王子がもう一人現われたと言う話は、朝廷では不自然なほど完全に揉み消されていた。口に出してはならない禁忌のように扱われていた。そして、それゆえ偽の王子が何者なのか、そのことについても、けして誰も口にしようとはしなかったし、どうやら真相を知っている者は誰も居ないように思われた。
だから、本物のシータ王子が、今どうしているのか、生きているのか、どこかに捕らえられているのか、それすら定かではなかった。
そこへやってきたのが、キースの朗報だった。
「どういうこと？シータ様は無事なの？どうして分かったの？」
「陛下もなかなか間の悪いことをなさるものさ」
キースはにやりと笑って言った。
「偶然にも俺の部隊が抜擢されたんだ。シータ様の捕らえられている牢の監視役に」
「なんてことだ。じゃあ……」

「ああ。俺たちで、お助けしよう、シータ様を。」
キースは高らかに言い、その場に居た者全員が大きく頷き返した。

「待て、待ってくれ……頼む、父上に合わせてくれ！」
わずかな食料を届けにきた衛兵にシータはもう何度目か分からないその科白（セリフ）を必死で呼び掛けたが、衛兵はシータに一瞥（いちべつ）すらくれず去っていった。
固い格子はシータが揺すってもびくともしない。　床は固い石で、じめじめとしていて、眠ることすらままならなかった。
あれからいったい何日がたったのだろう。
貧しい食事と眠れない日々に、シータはまた少し痩せてしまっていた。
うとうととする度に浅い夢を見る。あの自分とそっくりな顔をした男が自分を捕らえに来るのだ。何度も、何度も。大勢の人間が、シータを指差して笑う。不肖の王子、と。お前のような王子は不要だ、自業自得だ、と。
「なんで、こんなことになったんだ……」
シータは口に出して呟いた。そうでもしなければ、沈黙と、薄暗い牢の空気と闇に、どうかなってしまいそうだった。
そんな時、ふと胸に下げていた飾り剣に思いあたった。リーアのくれた飾り剣。これは、奪われることもなくずっとシータの首に掛かっていた。シータは思わずいつかのようにその飾り剣を握り返していた。
そうだ、忘れてはならない。リーアもどこかで、自分と同じように囚われの身となって辛い思いをしているかもしれないのだ。リーアを助けなければならない。リーアと、コルネイフを救わなければならない。その為に、自分はこんなところで挫けている訳にはいかないのだ。

そんな思いを抱えながら、何度目かの浅い夢を見ていた時だった。
こつこつこつ……と、静かな足音が近づいてきた。また、あの夢か。あの男が、自分を捕まえに来たのか……？
「シータ様」
シータははっとして飛び起きた。
「シータ様、ご無事ですか？」
シータは思わず牢の入り口に駆け寄る。
「よかった……。ご無事のようですね。ビーツ・ナインアータよりお話をうかがい、シータ様をお救いに参りました。わたくしは、アリス・シッチリグと申します」
アリスと名乗った女性は、牢の扉の鍵を開けた。
牢から出ると、アリスのかたわらにもう一人、黒髪の騎士が居た。
「私は、スコット・ナインアータと申します。命に掛けても殿下をお救い致します」
スコット・ナインアータ。ビーツの息子だ。国政に疎いシータでも、さすがにその名は知っていた。父に劣らぬ実力を持った騎士だという話だ。
ふらふらと立ち上がったシータを、二人はしっかりと支えてくれた。
「お痛(いた)わしい。シータ様ともあろう御方が、このような……」
アリスはシータの手首に付けられた手錠の鍵を外しながら言った。
シータは二人に支えられながら、薄暗い牢の廊下を歩いた。牢は普段は使われていない物らしく、他の部屋はすべて空だった。
「父上は、私が本物のシータだと分かってくれたのか？私と同じ姿をしたあの者はいったい、何者なんだ？」
シータは牢に押し込められて数日悶々としていた疑問を二人にぶつけた。
しかし、アリス・シッチリグは暗い廊下を歩きながら答えにくそうに言った。
「陛下はいまだあの偽の王子をシータ様だと思い込んでいらっしゃ

います。どのような術を使ったのか。そしてあの者が何者なのかと言うことも、申し訳ございませんがまだ何も分かっておりません」
「そうか……。では、宮廷にはまだ、あの者がシータ・ファルセウスの名を名乗って居座っているのか。だが、私が私だと信じてくれる者も居ると言うことなのだな？」
シータは期待を込めて言ったが、アリスもスコットも、これには苦く頷き返すことしか出来なかった。宮廷にも、シータをシータだと信じると、声高に言う者は居なかった。それは、口にしてはならないことのように、皆表面上はカイラル王と偽の王子に従っていた。
途中、出口の近くでビーツが三人を待っていた。
「ビーツ！そなたも助けにきてくれたのか」
「はい、殿下。貴方様のことは、このビーツが必ず証明してみせますゆえ」
シータは心から安堵した。ビーツが味方で居てくれる、これ以上に心強いことはなかった。
重い扉を開けて牢の外に出る。時刻は夜らしく、辺りは真っ暗だったが、明るい篝火（かがりび）がたくさん掲げられており、牢から出てきたシータ達を照らした。
シータはそこでシータ達を待っていた者達全員が当然、シータを信じ、シータを助けだそうとして集まってくれた者だと思った。だから、シータの前に進み出た男の顔を見て驚愕した。
戦いの為の甲冑に身を包み、数十人は居ようかという兵団の中央で、悠然とこちらを見ていたのは、あの、シータそっくりな顔をした男だったからだ。
「まったく、愚かなヤツだ。大人しくしていれば牢の中で一生楽しく過ごせていたかもしれないと言うのに。貴様を生かして置けという者も多く居るようだが、逃亡しようとしたから斬り殺してしまったと言えば、誰も文句は言うまい」
シータは焦った。こいつはいったい、何を言っているのだ。
そしてこの事態に驚愕したのはビーツ、スコット、アリス、の三

人も同様だった。
「いったい、どう言うこと！？」
「……すまないな」
アリスの叫び声にも似た言葉に答えたのは、偽のシータ王子の隣で、土気色のような顔色をしてこちらを見ているキースだった。
「そんな、貴方、あなたが、言ったのではなかったの？シータ様をお助けしようって！」
アリスは思わずそう叫んでいた。
「まさか、……あなたがシータ様の牢の衛兵に抜擢されたと言うのも、シータ様を助けだそうとあなたが言ったことも、すべて仕組まれていたことだと言うんじゃないでしょうね！？」
アリスの言葉はほぼ絶叫に近かった。しかしそれに対するキースの言葉はない。
「仕方が無い……こうなったら、どうにかしてここからシータ様をお逃がせするんだ！」
スコットは宣言するように言って剣を抜き放った。
「シータ様、私から離れなさるな」
ビーツも続いて剣を抜き、シータの為に持ってきた二本目の剣を渡しながら言った。
戦いの火蓋は切って落とされた。スコットはもちろん、キースと対峙した。自分達を裏切ったキースの気持ちを計りかねていた。キースすらも、彼自身が言っていた偽の王子の“魔術”とやらに魅せられてしまったと言うのだろうか。
対する相手は恐らくキースの率いる国王軍第八部隊だ。その隊長であるキースと、自分、いずれに軍配が上がるかにこの戦局の決定があると言っても過言ではなかった。
今の自分とキース、いずれが強いのか、スコット自身にも分からない。士官学校時代はよく手合せしていたものの、お互いが国王軍の連隊長になってからは、剣を合わせる機会などほとんど無かった。
「スコット、なんだその剣は？そんなもので俺を倒せると思ってる

のか？」
　キースの言う通りだった。スコットの剣には迷いがあった。キースの裏切りによる迷い。シータ王子を救うことが果たして本当に正しいのかという迷い。対するキースの剣には寸分も迷いが無かった。キースは迷いなく自らの従うべき相手、従うべき道を選んだのだ。
「何故だ？なぜ。お前はシータ様を裏切ったのだ。陛下への忠心か？それとも、お前もあの魔性の者に心奪われたと言うのか？」
　スコットはキースの剣をなんとか受けとめながら問い掛けた。キースは何も答えない。冷静だが、強烈な剣の冴えが、その答えと思われた。速い。スコットには、その激しい斬撃の応酬についていくだけで精一杯だった。まずいな……スコットは戦況の全てに対し、苦い予感に囚われた。
　斬撃を交わしあう二人の傍らで、迷いに囚われていたのはアリスも同様だった。アリスは誰よりもキースの裏切りに衝撃を受けていた。アリスはキースに対し、戦友であること以上の感情を抱いていたのだから。キースとスコットが戦う姿など、とても見ては居られなかった。さらに、対する国王軍第八部隊は、アリスもこれまで共に戦ったことのある気心の知れた仲間達だった。彼らに剣を向けることなど自分に出来るのか？
　戸惑うアリスを置き去りに、戦局は動いていく。スコットとキースは剣を打ち合い、ビーツはシータ王子を護りながらなんとか逃げ道を切り開こうと奮闘している。自分は、どうすればいい？シータ王子を助けることが、果たして正しいことなのか？
「シッチリグ殿、何をやっている！？殿下をお助けすると決めたのだろう？迷いを捨てよ！」
　ビーツの声が閃くように響いた。
「ビーツさん……！」
　アリスは歯を食い縛って剣を抜き放ち、第八部隊の兵士達に対峙した。戦いたくはない。だから、シータ様を逃がすために、最低限の戦いをしよう。

甘い考えではあったが、アリスには、それを実行出来るだけの技量があった。
「第八部隊の騎士達！貴方達にも心や考えがあるのなら、この状況を見て考えを改めなさい！どちらが本物のシータ殿下か。どちらを助けることが国家に対する真の忠義であるか！」
アリスは一喝するように言い放ち、戦場へ躍り出た。対する兵達も、三新星に数えられるアリス・シッチリグの強さは知っている。多少の動揺が第八部隊に走った。
アリスもビーツももちろんその隙を逃したりはしない。
「シータ様、わたくしに続いてください！」
アリスは第八部隊の兵達の剣を素早い身のこなしで巧みに跳ね返し、その多くを峰打ちによって制した。
「待て！何をやっている！？絶対に、そやつを逃がすな！！」
偽の王子は、たった四人の相手による猛攻に焦り、怒鳴り声を上げた。自らシータに向かおうとする偽の王子の前に、ビーツが立ちふさがる。
「殿下、いけません！相手はビーツ・ナインアータです、御身が危ない！」
第八部隊の兵も偽の王子を護るため奮闘するが、その誰もがかつての英雄ビーツ・ナインアータを恐れた。
戦局は混乱を極めた。そしてその混乱はむしろシータ達を味方したと言えるだろう。アリスはその隙を見て活路を見いだし、なんとかシータ王子と共に第八部隊の兵の壁を抜けた。
「シータ様！抜けました！このまま王城の外へ逃げ出しましょう」
アリスはシータを連れて走った。何本かの弓が二人の後を追ったが、そのいくつかは躱(かわ)し、いくつかはアリスの剣が切り落とした。
「フィードを、ペガサスを呼べればな……」
シータは必死で走りながら、ペガサスを置いていかなければならないことを口惜しく思った。フィードはここに着いた時、いつものようにシータ専用の城の厩に繋いできてしまったのだ。今から取り

にいくことなどとても出来そうにない。
二人が走っていたのは、城の裏庭だった。逃げ出すならば城の裏門からだ。
しかし次の瞬間、アリスとシータの目に信じられないものが映った。
二人の目指す真正面から、甲冑の音と靴音を高く響かせ、国王軍の兵士が列をなして歩いてきたのだ。第八部隊の比ではない。何十、何百と言う数の国王軍の兵士が横ならびになって歩いてくる。そして、その先頭で騎上からシータを鋭く見下ろしていたのは、他ならぬ父王カイラルだった。
絶望が、シータの心を暗く満たしていくのを感じた。
「父上……！！きちんと私を見てください！私が貴方の息子です、シータ・ファルセウスです」
シータは何度目になるか分からないその言葉を、必死に、懇願するように叫んだ。しかし、その声が父王に届くことはなかった。
「構えよ！」
カイラル王の言葉に従い、国王軍の兵士は皆一様に矢を番(つが)え、真っすぐにシータを狙った。
「そんな……！お待ちください！何故ですか陛下！何故陛下はシータ様をお救い下さらないのですか！？」
アリスは身を張り、シータをかばいながら叫んだ。しかし、カイラル王は高く手を掲げ、無慈悲に告げた。
「放て……！」
「アリス！！」シータの叫び声が夜空に響いた。
あの数ではアリスであろうともとても避けられない。
その時、
全てがしんと沈黙し、夜空を飛ぶ矢羽根が一斉に空中で静止した。
シータは何が起こったか分からず、ぎょっとして目を懲らした。
その、わずかな闇、カイラル王率いる国王軍と、自分達との狭間に揺蕩(たゆた)う闇が、一瞬揺らいだ気がした。

「女……」
シータは知らず口にしていた。闇の狭間から、一人の女が現れたのだ。
闇夜そのもののような漆黒の髪と、同じ色のローブに身を包み、白い肌は陶器のように滑らかでくすんだところが一つもない。歳の頃は二十歳前後と見える。見るものに寒気を与えるような、完璧な美しさを纏(まと)った女だった。その細い首は、何故か不自然に傾いて、射すくめるようにカイラル王を見つめている。
「愚かな王……」
女は低いが、深く艶のある声で言うと、傾いだ首を元に戻した。その動作に合わせて空中に留まっていた何十本という矢が、バラバラと地に落ちた。
「何故だ……。サーディーン、そなたはそやつの側につくと言うのか？」
カイラル王は女を前に呻(うめ)くように呟く。
「愚かな王……」
女は再びそう口にした。
「あなたは、何も分かっていない」
女は本当に憐れがるような口調でそう言った。

第十二話：黒衣の魔術師

「フィード、おいで」
黒衣の女は、子犬を呼ぶかのような気軽さでそう言い、カイラル王に向かって小さく手招きをした。すると突然、カイラル王の乗っていた騎馬が高くいななき、前脚を高く蹴り上げるようにして、カイラル王を振り落とした。カイラル王は抵抗の出来ない何か不思議な力によって不様に地べたに転がり落ちた。
シータはその様をあっけに取られてみていた。カイラル王の乗っていた騎馬は、そのままの勢いでこちらへ掛けてくる。そしてなんと、騎馬だったはずの馬体の左右から、それが当たり前であるかのような自然さで見る見る黒い二枚の大翼が生え出した。
「フィード……！？」
シータは我が目を疑った。だが、それは間違いなくシータがコルネイフで出会った黒天馬フィードに違いなかった。シータは戸惑いながらもその首筋を撫でた。フィードはあの静かな目で訴えるようにシータを見ている。
「殿下、今すぐ、アリスを連れてお逃げなさい。後片付けは私がしますから」
女はこともなげに言った。シータは困ったようにアリスを見やった。
アリスははっとしたように言う。
「シータ様、逃げましょう。この機を逃す手はありません」
アリスの言葉を受けて、シータはフィードに乗り込んだ。ご丁寧に鞍と鐙（あぶみ）まで付けてくれている。
シータはアリスを後ろに乗せると、手綱を引いた。
カイラル王と国王軍も、飛び立っていくそのペガサスを為すすべなく見ているだけだった。カイラル王も、黒衣の魔術師が出てきた時点で、もはや何をしても無駄だと言うことを悟ったのだ。

戦場に残されたキースとスコットは、もう何合目か分からないほど剣と剣を打合せていた。スコットは自らの劣性を感じながらも、未だ一つの傷を受けることもなく、キースの剣を受けとめていた。

もはやいずれの王子もその場に居なかった。偽の王子はビーツ・ナインアータの猛攻を恐れた国王軍の兵士達に強引に退散させられ、ビーツもまた本物のシータ王子の方の後を追ってこの場から去った。第八部隊の幾人かはシータ王子らを追い掛け、残りの幾人かはその場に残り、キースとスコットの一騎打ちを固唾を呑んで見守っていた。皆、すでに戦う意義は失われたことを悟っていた。しかし、キースとスコット、彼ら自身も、そしてその場に居た者達も、二人がこの場で雌雄を決することの意味を感じていた。

「スコット、お前はさっき、なぜ俺がシータ王子を裏切ったかと聞いたな？」

キースは剣を打合せながら、まったく呼吸の乱れを感じさせることと無く言った。

「……答えは決まっている。俺が仕えるべきはランサー王国であり、その主君たる国王陛下だからだ」

キースの言葉に迷いはなかった。恐らくここに居る者達の多くの心の内も彼とまったく同じだろう。自分達が仕えるのはシータ王子ではなく、ランサーとその国王なのだと。それほどに、賢君と呼ばれたカイラル王の人望は厚く、ランサーの年若い王子への期待に、まさかそれを勝るほどのものがあるはずもなかった。

だが、そうだとしても、それではシータ王子はどうなるのだ。彼がシータ王子その人だと言うことは誰の目にも明らかだというのに、誰にも顧（かえり）みられず、葬り去られてしまっても構わないと言うのか。スコットはそう、叫びたかった。

それは一瞬の隙だった。たった一瞬気を緩めた隙を、キースの鋭い剣先が貫き、スコットの剣は激しい刃鳴りの音とともに虚空へ弾き飛ばされた。

スコットは茫然とそれを見つめ、キースの返す一撃が自らの首に迫るのを見ていた。
キースはすんでその剣を止め、静かにかつての戦友を見返した。
「言っただろう。そんな迷いのある剣では俺に勝てないと」
たしかに、キースとスコットの実力はほぼ五分五分だった。その場に居た誰もが、どちらが勝ってもおかしくはないと感じていた。スコットが破れた理由はやはり、その心の内に微かな迷いがあったからであろう。
「だがそれでも俺は、こんなこと認めない。俺は何があっても、シータ様が誰にも顧みられず殺されるなどと言うことは、とても認めることはできない」
スコットは敗北を認め、死の一撃を目の前にしてもなお、怯むこと無くきっぱりと言った。
「……良いだろう。どこへなりとも逃げるがいい。だが、二度とランサーへは戻ってくるな。お前と次に顔を合わせる時があったとすれば、俺は今度こそお前を殺すだろう」
キースは静かに剣を収め、きびすを返して去っていった。第八部隊の者達もその後に続く。
スコットは苦い敗北感に打ちのめされながら、去り行く友の後ろ姿を見送った。

「アリス、あの若い女はいったい誰なんだ？」
「シータ様はサーディーン・ウッディールをご存じないのですか？」
「サーディーン・ウッディール？ではあれが、ランサーに仕える魔術師だと言うのか」
シータはフィードの手綱を引きながら驚いて聞き返した。
「そうですとも。若く見えますが、年齢は数百とも、千を超えるとも言われます。そうですね、カイラル陛下のご治世になって、国が安定しましたから、サーディーンも最近は朝廷に顔を出しておりませんものね。シータ様がご存じないのも無理はございません」

サーディーン・ウッディールは何世代もの永きに渡ってランサー王家に仕えてきた魔女だ。ランサーが乱れ、間違った方向へ進もうとする度に彼女が現れ、知恵を授けてランサー王家を助けてきた。ランサー王家も代々彼女に救われてきたと言う歴史があるから、彼女のことは丁重に扱い、彼女の言葉を尊重してきた。今回、そのサーディーンがシータ王子を助けたと言うことはつまり、カイラル王の過ちが証明されたことに他ならないのではないだろうか。

「それに……」

アリスは知らず口にしていた。サーディーンは公衆の面前で、ああも堂々と魔術を使った。こんなことは前代未聞のことだった。魔術師が巷の人間の為に魔術を使うなどと言うことは、彼らにとって禁忌（タブー）であるはずだった。それだけ、シータ王子を助けたかったと言うことなのだろうか。

やがて二人はランサーの城下町から少し離れた、古びた洋館に辿り着いた。恐らくサーディーンがフィードに行き先を教え込んでいたのだろう。シータはただ手綱を持っていただけだったが、フィードは行き先を知っているように二人をその洋館へと案内した。

黒に近い灰色の石で出来た洋館は、いかにも魔女の拠城といったまがまがしい雰囲気を纏（まと）っていた。フィードはそのポーチの前に着地すると、自らすたすたと洋館の隣にしつらえられた厩へ向かった。

シータは呆れて鞍から降りた。どんな術を使ったか知らないが、よく教え込まれたものだ。

「ひとまず、中へ入ってみましょう」

アリスに促され、二人は洋館の扉を開けた。両開きの扉が軋みながら二人を招き入れる。

中は吹き抜けのロビーで、外見よりも小綺麗にされていた。床に敷かれたビロードは鮮やかなえんじ色。正面から真っすぐ階段が伸びており、二階の廊下へ続いている。

二人が戸惑っていると、正面の階段からころんころんと小さな犬が下りてきた。ふさふさした黒のむく犬だ。魔女なら黒猫ではないの

か。と思って見ていると、黒犬はフスフスと変わった鳴き声を上げながらシータにじゃれついてきた。
「お前もここの主人に何か教え込まれてるのか？」
シータがふさふさの頭を撫でてやると、むく犬はシータにひとしきりじゃれついた後、ふと動きを止めて、またころころと階段を上がっていく。シータとアリスは顔を見合わせ、彼の先導に着いていくことにした。
階段を上がると二階の廊下に出た。むく犬は相変わらずフスフス言いながら、二人を廊下に並んだ部屋の前まで
シータとアリスが戸惑っていると、その正面の階段からころんころんと小さな犬が下りてきた。ふさふさした黒のむく犬だった。むく犬はシータの足元に辿り着くと、フス、フスと変わった鳴き声を上げながらシータにじゃれついてくる。魔女なら黒猫ではないのか。と思いながら、シータは思わずその頭を撫でてやった。するとむく犬はひとしきりシータにじゃれた後、ふと動きを止めて、またころころと階段を上がっていった。シータとアリスは思わず顔を見合わせ、その後を追った。
むく犬は相変わらずフスフスと鳴きながら、二人を廊下に並んだ部屋の一つに案内した。ビロードの絨毯（じゅうたん）の上に深緑の達筆が浮かび上がる。
“シータ王子のお部屋”
シータは思わず笑いそうになりながら、アリスの顔を見た。
「私の部屋だそうだ。ランサーの宮廷魔術師はなかなか茶目っ気のある方みたいだな」
中は深緑に統一された調度で揃えられた、なかなか豪奢な部屋だった。やはりえんじ色のビロードが敷かれ、ニスで磨き上げられた木材の壁の焦茶と、深緑に金の装飾のされた調度との色合いがなんとも美しい。
「シータ様、お疲れでしょう？牢獄では満足にお眠りになることもできなかったでしょうし……。せっかくサーディーンがシータ様の

ために準備をしたようです、お休みください。私が皆を待ちます」
「構わないか？」
「ええ。もちろんでございます」
「すまない。では休ませてもらう。正直なところ、本当にくたくたなんだ」
シータはアリスの言葉に甘え、少し眠ることにした。アリスの言った通り、牢獄では満足に睡眠も取れず、城から抜け出す為の戦いにくたくたになっていたシータは、ベッドに就いた途端、泥沼のような眠りに落ちた。

第十三話：ニーベルンの女王（上）

「スコット……！ビーツさん、無事だったのね！」
アリスはサーディーンに伴われて館へやってきた二人を見て心から安堵した。
「良かった……。スコット、キースが、キースが……」
アリスはキースの裏切りから完全に立ち直れてはいなかった。
スコットは青ざめたアリスの表情を見て思わずその細い肩に手をやった。
「スコット、私はもう、何が正しいのか分からなくなってしまった。シータ様をお救いすることが、本当に正しいことなの？シータ様をお救いするために、陛下や国王軍に反することが本当に正しいことなの？」
アリスは抗議するように言った。スコットは衝撃を受けた。アリスまでキースと同じことを言うのか。国家への裏切り者は、むしろ自分達ではないのか、と？
「あなたは国王軍で素晴らしい活躍をしてきて、これからのことも期待されて、騎士として華々しい道が開けていたと言うのに、すべてを棒に振ってしまって、構わないと言うの？」
本人は冷静なつもりで居るのだろうが、恐らく彼女は多少、キースの裏切りに冷静さを欠いている、スコットはそう思った。
「アリス、たしかにお前の言うことも分かる。だが、もし、真相を知っている我々までもがシータ様を見離してしまったら、いったい誰があの方をお助けするんだ？キースは俺たちとは立場が違う。あいつは古くからランサー王家に仕える名門ティリンス家の嫡子だ。あいつはあいつの立場として、陛下に従うしかなかったんだ。あいつの選択も俺は認めようと思う」
スコットは先程の苦い敗北を思い出しながら言った。そしてあの時自分を逃がしたキースの心の内も、スコットには分かった気がし

た。
「俺は一度キースに敗れた。キースは俺を殺すことも出来たが、俺はあいつに生かされた。何故だと思う？……あいつはたぶん、俺たちにシータ様を任せたいと思ったのだろうと思う。」
どこへなりとも逃げろ、ランサーへ二度と戻ってくるな。その言葉の意味は、シータ様を連れてどこへなりとも逃げろ、ということだったのではないか。
「ご名答。さすがはランサー十二騎士ナインアータのご当主だわ。」
先程まで静かに二人の問答を聞いていたサーディーン・ウッディールは満足気に言った。ちなみに彼女の言うランサー十二騎士とは、ランサーに仕える騎士階級の家の中で特に歴史と武勲ある十二の家系を呼ぶ古い呼び方である。ナインアータのように永くその地位を保ってる家系はそれほど多くなく、歴史の中でその多くが廃れ、今も残っているのはその半数ほどであったが。
「ここは少しはっきりさせて置く必要があるわね。シッチリグのお嬢さんにいつまでもぐずぐず迷われていても困るから」
サーディーンは軽く皮肉るように言って続ける。
「貴方達が面倒臭いぐらいに大義名分を重んじる種族だということをすっかり忘れていたわ。公平を期すためにも私はあまり口出ししないようにしようと思っていたんだけど、それならば一つだけ手掛(ヒント)かりをあげましょう。貴方たちが偽の王子と呼ぶあの少年ね、あれはエドルニアと繋がっているのよ。陛下もランサーも、エドルニアの間者に惑わされているだけと言うわけ。……これで分かったでしょう？アリス、貴方の言葉を借りるなら、何をすることが“国家に対する真の忠義”であるか」
「サーディーン様……」
「アリス、貴方には一つ、重要な役目をあげるわ」
サーディーンは唐突に言った。
「あなた、ペガサスには乗れるでしょう？これからすぐにフィードに乗ってニーベルンへ行きなさい」

「ニーベルンへ？」
アリスは驚いて聞き返した。たしかにアリスもランサーの女騎士のたしなみとして一応ペガサスの操縦は心得ていた（エレスゲンデの女騎士には珍しく、アリスはペガサスの騎士ではなかった）。しかし今すぐにニーベルンへ向かうとは。
「夜が明ける前にミルラ海峡を越えて、ニーベルンへ入りなさい。そして、ニーベルン城の女王に御助力を願い出るの。彼女ならシータ王子を匿（かくま）ってくれるかもしれない」
「女王陛下に？……なるほど、分かりました」
「もしも、彼女が我々の願いを拒むようならば、この紙を出しなさい。私からの言伝（ことつ）てだと言って」
サーディーンは何の変哲もない葉書大の白い二つ折りのカードをアリスに渡した。
スコットは慌ただしく出発していくアリスを見ながら、なるほどと思った。賢者は二手三手先を読んで動くと言う。北のニーベルンへ逃げるならば予め使者を送って伺（うかが）いを立てておく必要がある。と、同時にアリスにその重役を課すことで彼女の心の迷いを払拭しようと言うのかもしれない。気難しい黒天馬が彼女の言うことには立ち所に従ってしまったことを見るにつけても、やはりランサーの賢人サーディーンの力は偉大だと感じた。
ただし、彼女自身も言っていたことだが、恐らく彼女は自分達にすべてを明かしてはいない。
偽の王子がいったい何者なのか。それがエドルニアの間者だったとしても、なぜ賢君と呼ばれたほどの陛下がその言いなりになっているのか。さらに言えば、何故陛下は本物のシータ王子を殺そうとしたのか。やはり、偽の王子も魔術のような、尋常でない力を持つゆえなのか。疑問は何一つ解決されていない。
とは言え、少なくとも自分達の行動は間違ってはいない、とスコットは思う。少なくとも、賢人サーディーン・ウッディールに従っている限り、物事は必ず上手く運ばれるし、ランサーの将来も安泰

だろう、そう感じさせる程の力が、彼女にはあるように思われた。

アリスはサーディーンの言った通り、夜が明ける前に闇夜に紛れてニーベルンの位置するカラ島に入った。ランサーの城下町を飛んでいる時もそうだったが、ニーベルンとの国境を越える時はかなりひやひやした。ランサーからの追っ手があるかもしれないし、ニーベルンにしてもこのようなご時世だ。普段以上に国境の警備は厳しくなっていることだろう。

しかし、闇夜はフィードの黒い姿をしっかりと隠してくれた。アリスは久方ぶりのペガサスの操縦に正直まったく自信が無かったのだが、賢いフィードは自分の役割をよく理解しているようで、アリスのぎこちない手綱を嫌がることもなく、むしろアリスを上手くリードしてくれた。

「お前は本当に賢いね。もう間もなくコルネイフ城だよ。夜が明けるまでまだ少し時間がありそうだけど、こんな時分にお城に入って大丈夫かしらね」

アリスの心配した通り、アリスがコルネイフ城の城壁に近づくと、衛兵は突如現われたペガサスに驚き、一斉に弓を引き絞ってアリスを狙った。

「待ってください！私はランサーからの使いです！」

衛兵は戸惑った。同盟国ランサーからの使者だとすれば矢を放つ訳にはいかぬが、こんな真夜中に現われるなんて、本当にランサー国王軍のペガサスなのか？

アリスは城壁の上空でフィードを空中停止させると、腰に帯びた剣を鞘ごと衛兵の足元へ投げ捨てた。衛兵はアリスの大胆な行動にたじろいでどよめく。

アリスは構わずフィードを城壁の中に着地させて言った。

「事態は一刻を争います。どうか、女王陛下にお目通りを！」

衛兵はアリスの投げ捨てた剣の鞘の紋章を見て、彼女が確かにランサー国王軍の騎士であることを確認した。だが、どうしたものか、弓矢と剣を構えて彼女の周りに小さな輪を作ったまま判断に迷っていた。

「ランサーの騎士にもなかなか勇敢な者が居るものだ。火急の使いか」

小さな輪に近づいて来た人物を見て、アリスは思わず身を固くした。

「ラダヌ＝バファル将軍……」

現われたのは白髪の老騎士だった。ラダヌ＝バファルとは、かつてニーベルンの騎兵団の総大将を努めた猛将である。今は老齢により大将を退いたと言う話だったが、その眼光はいまだなお鋭く、ニーベルンにこの人ありと言われた往年の姿を偲ばせる。

「私は、ランサー国王軍第二連隊副隊長アリス・シッチリグと申します。このような非常識な時刻に国境を侵しました非礼をお許し頂きたい。しかし、事態は、一刻を争うのです。無礼は承知ですが、どうか、女王陛下にお目通りをお願い致します」

アリスは心から恐れ入って、その場に跪きながら言った。

「ほう。シッチリグのお嬢さんか。立派になられたな」

アリスは弾かれたように顔を上げた。

「シッチリグの名をご存知ですか？」

「無論だ。ローヌ・ルベルト殿とはかつてしばしば肩を並べて戦った仲だ」

アリスは言われて、顔から火が出るような思いだった。ここでローヌ・ルベルトの名を出されるとは。

たしかに、バファル将軍が活躍していた時代は、アリスの父ローヌも健在で、シッチリグはまだ爵位を持っていた。しかし現在もうシッチリグ家は存在しない。アリスは所謂、没落貴族だった。

「恥ずかしながらシッチリグは、そのローヌ・ルベルトの無調法により、すでに没落しました。わたくしも今や身分を持たぬただの一

兵卒です」
　アリスの父ローヌ・ルベルトは強欲な男だった。その欲深さゆえ、先王が崩御した際の継承者争いの中で、現国王カイラルではなく王弟側について破れた。シッチリグは元々それなりに高位の貴族階級にあったが、ローヌの失脚により爵位を剥奪され、完全に没落してしまったのだった。
　だからこそアリスは、人一倍努力をして剣の腕を磨き、自らの剣の力で武勲を上げ、シッチリグの汚名を晴らそうとしていた。
「そうであったか。……栄枯盛衰は世の常だ。永久（とこしえ）の栄華を誇るとも思われたこのエレスゲンデすらも、今や危機に陥ろうとしている……よかろう、来なさい。火急の用とのことなれば、こんなところで立ち話をしている暇もなかろう」
「ありがとうございます！」
　アリスは心から礼を言って立ち上がり、ラダヌ＝バファルの後に続いた。

第十四話：ニーベルンの女王（下）

アリスが初めて訪れたニーベルンの宮殿は、実に壮麗なものだった。

何層にも連なって入り組んだ複雑なランサー王城とは異なり、ニーベルン城は地に這うような平らな形をしている。その単純さが逆に見る者を圧倒するような重厚さを醸（かも）していた。ニーベルンレッドとも呼ばれる葡萄茶（えびちゃ）の屋根や装飾と、白亜の壁のコントラストが、篝火（かがりび）に照らされて美しく映える。

広い廊下に、アリスを取り囲んだ甲冑の奏でる賑やかな音ががちゃがちゃと響いた。アリスはバファル将軍に連れられながら、ほんの一時も緊張を解くことが出来なかった。周りを取り囲むニーベルン兵達だけならばまだしも、先導するバファル将軍からは、例えようのない威圧（プレッシャー）感を感じていた。アリスが何かしようものなら、一刀のもとに切り捨てるとでも言うような、圧倒的な威圧感だった。

しばらく廊下をいくつか通り過ぎた後、広いホールに辿り着いた。

天井は、フロア三階分以上はありそうな高い吹き抜けのドームで、風の流れがあると思ったら、扉の無いドアのような入り口が左右にいくつも切られていた。外は庭へ繋がっているようだったが、今は暗くて良く見えない。

そして正面には、薄桃色の大理石を磨いた、背もたれの高い玉座が置かれている。その主はまだ姿を現していなかったが、アリスはニーベルンの女王の厳しい眼差しを思い出して、身の引き締まる思いがした。

兵士達はバファルを残して左右に下がり、バファルがアリスを促すように玉座の手前で腰を折ったので、アリスもその半歩手前に跪いた。

やがて、衣擦れの音とともにニーベルンの女主人が姿を現した。

「面(おもて)を上げなさい、ランサーの若き騎士よ」
彼女は玉座にゆったりと座ると、アリスを見下ろして言った。
アリスは顔を上げ、ほんの一時、恍惚(こうこつ)とその姿に見入ってしまった。
ニーベルン国王、コーディリア四世。
齢(よわい)は今年、三十を越えると言うが、古典的な文様のレースをあしらった渋い嫩草色(わかくさいろ)のドレスから伸びるほっそりとした腕にも、柔らかい白金(プラチナム)の色をした長い髪に縁取られた知性的な面持ちにも、年齢からくる衰えなどはまったく感じさせない。
「ランサーの王太子からの使いと聞いたが、このような時分にいったい何用じゃ？」
アリスは震えそうになる声を励ましながら答えた。
「はい。わたくしは、ランサー国王軍第二連隊副隊長を努めております、アリス・シッチリグと申します。ランサー王太子シータ・ファルセウス・グランランサーより女王陛下にお願いしたき儀がございまして、このような礼儀に外れた時刻に参上した次第でございます」
どう説明したものか、と、アリスは頭の中で目まぐるしく考えていた。彼女を説得出来るか、すべて自分の腕次第だ。アリスは責任の重さに体が震える思いだった。
「陛下のお耳にも届いているかと存じますが、ランサーは今、乱れております。シータ王子がコルネイフを訪問していたおり、コルネイフがエドルニアの襲撃に遭い、王子もその混乱に巻き込まれ、帰国がままならぬ状況でした。その間に、ランサーの王太子の座を魔性の者が乗っ取ったのです。恐らく、……我がランサーに古くより仕えたサーディーン・ウッディールと同様、魔道をこととする者かと。かの者は魔術の力により、ランサーの国政を支配しようと画策しているのです。」
アリスはそこで一つ間を置き、女王の反応を待ったが、彼女は表情を変える様子もなく、静かにアリスの言葉を聞いている。

「ランサー国王カイラルも、宮廷の者達もすべて、その魔性の者に操られ、騙されてしまい、本物のシータ王太子は、国を追われ、命を追われております。王太子を、女王陛下の庇護のもとに置いていただくことはなりませんでしょうか。陛下ほどのお力のある方に御助力頂ければ、ランサーの者達も手を出すことは出来ぬかと。図々しいお願いであることは承知しております、ですがどうか、陛下のご慈悲を……」

「ふむ……」

コーディリアは玉座に片肘(かたひじ)をついて、考えるように折り曲げた手の上に顎(あご)をのせながら言った。

「バファルよ、この者の言うこと、どう思う？」

コーディリアの言葉はどこか冷たく、ぞんざいに響いた。

「……荒唐無稽(こうとうむけい)かと。」

アリスは驚いて思わずその横顔を見ていた。

「そもそも、この使者が本当にシータ王子からの使いかどうかも分かりません」

「……そうじゃな。私もそう思う」

アリスは再び全身が震え出すのを感じた。そんな。バファル将軍は先程、自分をシッチリグの家の者として信用してここまで連れてきたのではなかったのか。

「アリス・シッチリグとやら、ここまでのご足労、大儀であったろうが、どうやらそなたの力にはなれそうにない。もしもその話がすべて本当だったとして、その王子を助けることで我々に利点があるとも思えない。申し訳ないが、我々も今、自国を守ることで精一杯なのじゃ」

コーディリアは相変わらずゆったりと肘を突いたまま冷たい口調で言った。さらさらと揺れる美しい銀髪が、今は恨めしく見えた。

「そんな……。“コーディリア陛下”ならばと思いお願いに参ったのです。戦乱の世こそ、情けを忘れてはならぬのではないのですか？」

アリスは必死に食い下がった。
サーディーンも、自分達も、ニーベルンの気高く賢き女王ならば必ず力を貸してくれると思ってアリスを送ったのだ。まさか、このような扱いを受けるとは。
アリスははっと思い出して胸元に挟んであったサーディーンの言伝てを取り出した。
「陛下、ならば、最後にこれを。ランサーの賢人サーディーン・ウッディールからの言伝てでございます」
進み出たアリスの手から二つ折りのカードを受け取ったコーディリアはそれを開いて首を傾げた。
「サーディーンからの言伝てとな。……白紙じゃが、別のものと取り違えたのではないか？」
「白紙……？」
アリスは焦った。取り違えたはずはない。サーディーンは確かに、彼女が断った場合はこれを出せと言ったはずだ。
しかし、コーディリアが示したカードは確かに、裏表白紙だった。
白紙？何か仕掛けがあるのか？サーディーンも誤ることがあるのだろうか。
「そんな……」
「もうよい。下がれ」
アリスが女王と交わせた言葉はここまでだった。
なんということだ。アリスは自分がひどいしくじりをしてしまったことに気付き、責任を感じて打ちのめされそうだった。まさかとは思うが、ニーベルンにまであの魔性の者の影が及んでいると言うのだろうか。
もしもそうだとすれば、自分はみすみす敵に情報を売ってしまったことになる。ニーベルンへ逃げ込むつもりが、逆に女王は、国境に網を張って待ち構え、シータ王子を捕えるつもりかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3934v/

エレスゲンデ戦記

2011年10月5日21時37分発行